

京都府埋蔵文化財情報

第94号

時塚古墳・時塚遺跡第6次の発掘調査 -----	福島 孝行 -- 1
	岡崎 研一
共同研究 古代日本海沿岸地域における土器様相の比較検討(下) -----	筒井 崇史 -- 11
	村田 和弘
	松尾 史子
平成16年度発掘調査略報 -----	31
4. 三角古墳群第2次	
5. 三日市遺跡第4次	
6. 椋ノ木遺跡第7次	
府内遺跡紹介 100. 史跡・蛇塚古墳 -----	37
長岡京跡調査だより・91 -----	39
センターの動向 -----	41

2004年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

ときづか 時塚古墳・時塚遺跡第6次の発掘調査

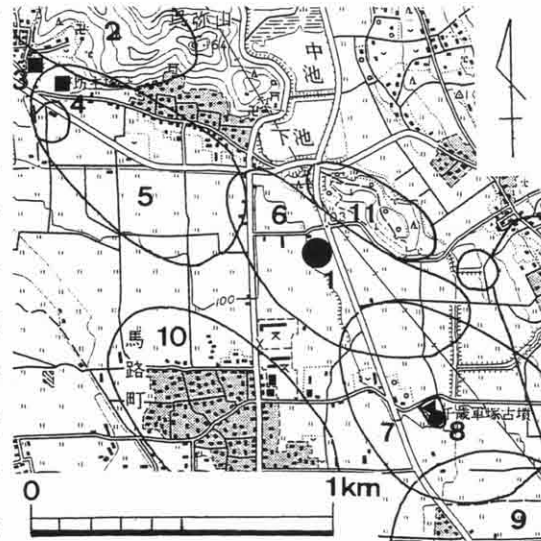
福島孝行・岡崎研一

1. はじめに (第1・2図)

この調査は、国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。時塚遺跡は、亀岡市北東部の馬路町字時塚に所在し、一部千歳町にかかる。その範囲は、東西約800m、南北約600mを測る。京都府教育委員会と亀岡市教育委員会が実施した試掘調査の成果をもとに、面的な調査を行った。調査を行うにあたっては3地区に分け、北からA・B・C地区とした。新たな古墳の一角を検出したB地区を時塚古墳、また、住居跡や柱穴などの検出により、A・C地区を時塚遺跡として調査した。

亀岡盆地東半分では、丹波国分寺・御上人林廃寺(丹波国分尼寺)付近から北西方向に府道郷ノ口・余部線が通る。盆地東縁をなす丘陵裾部から府道付近までが段丘によって一段高くなっており、多くの遺跡もこの高台に展開している。

丹波国分寺跡・丹波国分尼寺の北側には、国分寺の瓦を生産していた三日市遺跡が、その北側には千歳車塚古墳を中心に車塚遺跡が展開する。さらに、北側には時塚遺跡が、北西方向には弥生時代前期の土器が出土した池尻遺跡が広がる。池尻遺跡の南側や車塚遺跡西側の微高地上には、弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代の住居跡、古代から中世にかけての建物跡などを検出した馬路遺跡が存在する。また、これらの遺跡に重複する形で古墳が点在する。池尻遺跡北西隅には、一辺約30mの天神塚古墳と一辺約38mの坊主塚古墳が存在する。坊主塚古墳は南辺に造出を伴う。共に5世紀後半の築造である。坊主塚・天神塚古墳の背後の丘陵部には、27基の円墳からなる池尻古墳群が展開する。これらの古墳の大半は古墳時代中期を中心とする時期に築造され、坊主塚古墳などとの関係が指摘されているところである。また、車塚遺跡の中央には、全長約82mの前方後円墳である千歳車塚古墳が存在し、6世紀前半の築造時期が推定されている。



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000亀岡)

- | | |
|------------|-----------|
| 1. 調査地 | 2. 池尻古墳群 |
| 3. 天神塚古墳 | 4. 坊主塚古墳 |
| 5. 池尻遺跡 | 6. 時塚遺跡 |
| 7. 車塚遺跡 | 8. 千歳車塚古墳 |
| 9. 三日市遺跡 | 10. 馬路遺跡 |
| 11. 稲葉山古墳群 | |



第2図 調査地配置図



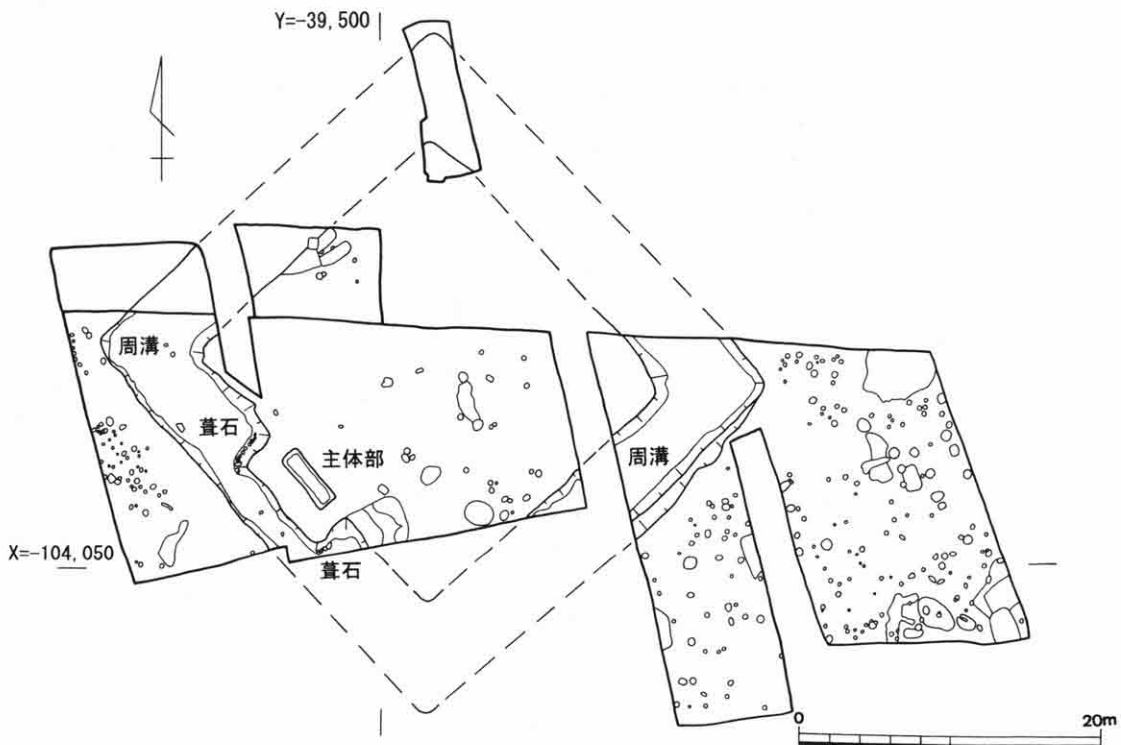
第3図 B地区空中写真(上が北)

2. 時塚遺跡B地区(時塚古墳)の調査概要

(1) 検出遺構(第3～5図)

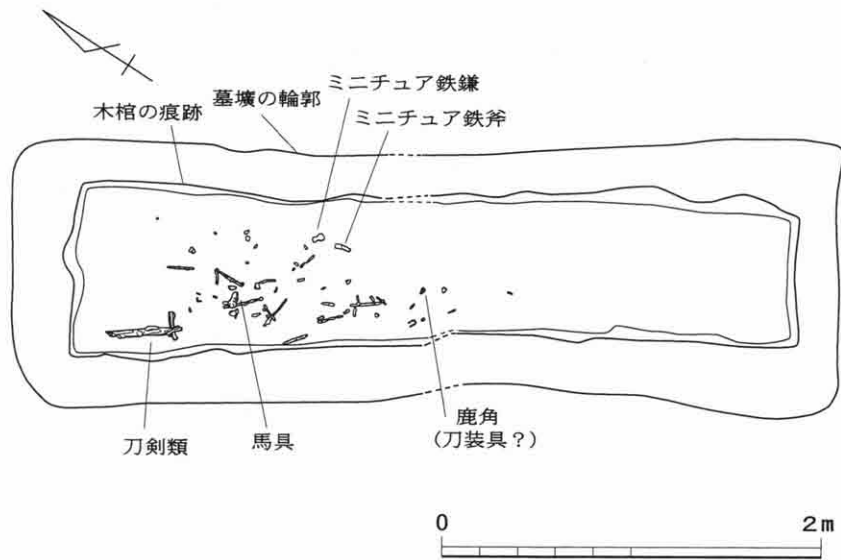
時塚古墳は時塚遺跡B地区の発掘調査で新規に発見された古墳である。古墳は全長25.4m、幅24mを測る方墳で、南西辺の中央に造出を付設している。マウンドは完全に削平され、中心の主体部もその痕跡すら検出できなかった。墳丘斜面には葦石が2段敷設されていたようで、造出の北辺および南辺の一部で残存部を検出した。

墳丘の周囲には幅6m、深さ90cmの周溝を方形に廻らし、周溝の東隅で形象埴輪群が出土したことから、この部分の外側には形象埴輪群が樹立されていたと考えられる。周溝埋土からは時塚遺跡に伴う弥生中期の土器が多量に出土したが、これらとともに飛鳥～奈良時代の須恵器が周溝のかなり下層部まで入っていた。古墳は周溝の再掘削を受けており、葦石のほとんどと墳丘斜面の一部を失っている。従って墳丘斜面の斜度は最大約60°になっており、通有の墳丘斜面よりは極端に急角



第4図 B地区平面図

度となっている。また、葺石を持ち去る際に取り残した葺石が南西周溝と南東周溝から数点出土している。これらの事実から時塚古墳は飛鳥～奈良時代に改変を受けていることが分かる。造出のほぼ中央部に長さ4.3m、幅1.5mを測る長方形の主体部を検出し



第5図 主体部実測図

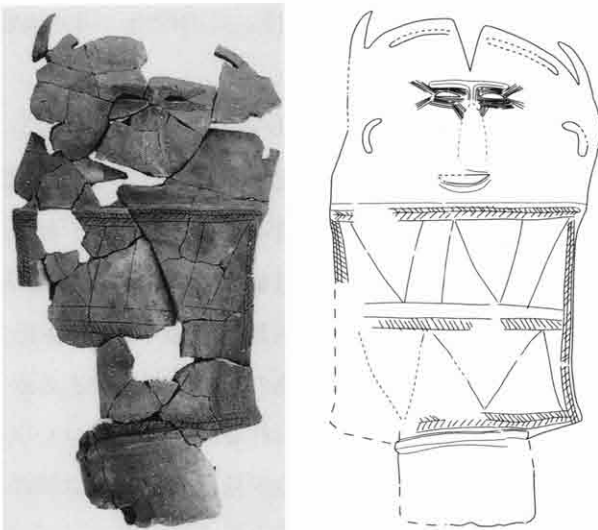
た。内部には長さ3.6m、幅70～80cmを測る木棺を据えた痕跡があり、副葬品はその多くが棺底から5～10cmほど浮いて出土した。従って現在整理中であるが、副葬品のほとんどは棺蓋上からの転落品であると考えられる。

(2) 出土遺物

時塚古墳から出土した遺物には、周溝から出土した形象埴輪のほかに、弥生土器・石器、奈良時代の須恵器、造出上の主体部から出土した副葬品の鉄器がある。これらの内埴輪の一部と鉄製品の一部について報告する。

①埴輪 出土した埴輪は形象埴輪のみで構成され、その器種には盾持ち人形埴輪・盾形埴輪・大刀形埴輪・甲冑形埴輪・人物形埴輪の5種がある。この内、盾持ち人形埴輪のみが須恵質で、残りは土師質の埴輪である。

盾持ち人形埴輪は、現状で高さ60cm、幅33cmを測る。直径約20cmの円筒部に下部では鱗を貼り付け、上部では半裁した円筒部に板状の盾部を貼り付けて盾部を表現している。頭部は盾部と一体で板状に作られており、円筒部の支えが途切れた所から後部へ反っている。盾部は長方形を呈し、外周は3本の直線と斜線によって革綴じを表現している。内部は中央の3本の横線と斜線によって上下2段に区画され、三角文や斜線文を繰り返す文様構成となっている。頭部は半円形を呈し、頭頂部から額にかけて逆三角形の切れ込みがある。また、耳にあたる部分の



第6図 時塚古墳出土盾持ち人形埴輪復原図(S=約1/10)

上部が角状に突出している。頭頂部と耳にあたる部分にスリットが空けられているが、頭頂部のスリットが何を表現しているかは不明である。眉上隆起と鼻が立体的に表現されているが、鼻の粘土貼り付けで表現されていた部分は焼成中(もしくは以前)に剥離している。両目の周囲は細く、短い線刻で隈取り状に線刻が行われている。この内、目尻で二股に分かれる表現は、福知山市稲葉山10号墳で出土した人物埴輪に共通する表現である。

辰巳和弘氏によると、大きく表現された耳は迫りくる邪悪の接近を予聴するためのもの。頭部の切れ込みや角状の表現、大きな鼻などは見る者を気味悪がらせて遠ざける表現。目の周りの文様は目を強調して目に視線を集め、目の力によって邪悪な者を追いやる表現であり、こうした頭部の諸特徴と盾という物理的な攻撃を防ぐ物のイメージとが重なり合って全体として邪悪な者から被葬者を守る意図が表現されているという。また、頭部と盾が一体化している点については、「盾持ち人形埴輪は人物埴輪ではなく、盾形埴輪を擬人化したもの」であって「その意味では時塚古墳の埴輪は盾持ち人形埴輪の意味を究極的に表現した」ものであるという。^(注1)

②鉄器 造出の主体部から出土した副葬品は全て鉄器であった。器種には馬具、矛、剣(または槍・戟)、鏃、ミニチュア鉄斧・曲刃鎌、鹿角装刀子、鉈などがあり、点数については破片毎に取り上げたため総点数は120点余りに上ったが、個体数は若干減るものと思われる。現在整理中であるため、詳細は調査概報に譲るとして、ここでは最も注目される馬具を報告しておく。

馬具は、鉄製f字形鏡板付轡1点と鉸具5点以上で構成される。この内、鉄製f字形鏡板付轡は主体部の棺蓋上頭部寄り(主体部の北西側、棺床から5~10cm程浮いた状態)で出土した。轡は銜外環をもつ2本の捻りのない棒状の銜と細くて小型のf字形鏡板・遊環、手綱側が屈曲しない引手及び瓢形引手壺で構成される。この内銜と引手の連結は、鏡板の外側で銜外環と遊環が連結し、その遊環に引手が連結する。また、引手と引手壺は直接連結し、兵庫鎖を介在させない。鏡板は「f」字形の屈曲が緩く、長さ約14cm、幅3.5cmと小型で縁金具をもたない。立聞は長方形で鉤金具は小さな金具を介して立聞と連結されている。こうした特徴をもつ鉄製f字形鏡板付轡は馬具の国産が開始された初期のものとの位置づけがなされており、中条英樹氏によると形引手壺系列の鏡板a類I段階に属す。^(注2)この段階は陶邑須恵器編年TK208型式に併行する時期とされる。

(3)古墳の時期

盾持ち人形埴輪および盾形埴輪の一部の円筒部に若松良一氏の言うB1a種ヨコハケが見られ、若松氏の見解では5世紀中葉には氏のB2a種ヨコハケへと発展的解消に向かうとされる。^(注4)古市古墳群の誉田御廟山古墳にはB1a種が一部残り、市野山古墳には残らないことから、B1a種からB2a種への転換は誉田御廟山古墳の築造がTK73~216であるとする、須恵質でB1a種の時塚古墳の盾持ち人形埴輪はTK208併行である蓋然性が高い。また、亀岡盆地の中期古墳の埴輪では、坊主塚古墳のものが著名であるが、こちらはC種ヨコハケが主体で、時塚古墳の埴輪より後出すると考えられる。また、ヨコハケの埴輪とタテハケの埴輪が混じる国分寺下層古墳の埴輪には須恵質のものが見られ、これ以降のV期の埴輪には須恵質のものが見られることから亀岡盆地での須恵質埴輪の焼成はIV期末に下がると思われる。なお、古市古墳群でのIV期の

終末はT K 23型式とされ、^(注5) 南山城ではT K 47型式である。^(注6)

これらの事実を総合すると、時塚古墳の埴輪はT K 208型式併行で須恵質埴輪の導入以前であること、また、須恵質の埴輪はハケメ条線が在地の埴輪よりも非常に細いことなどから見て他地域からの搬入品である可能性が極めて高い。この埴輪の時期比定は、先の馬具による時期比定と合致し、そのほかの副葬品とも矛盾しない。実年代は、5世紀後葉として大過ないと思われる。

3. 時塚遺跡A・C地区の調査概要

(1) A地区(第7～9図)

この地区からは、縄文時代の土坑、弥生時代中期の竪穴式住居跡・土坑、奈良時代後半～平安時代初頭の掘立柱建物跡・柱穴群を検出した。遺構は、調査地南側に集中しており、北側は希薄であった。また、調査地南隣の水田部を亀岡市教育委員会が試掘調査しており、弥生時代中期後半の方形の竪穴式住居跡と時期不明の掘立柱建物跡を検出している。

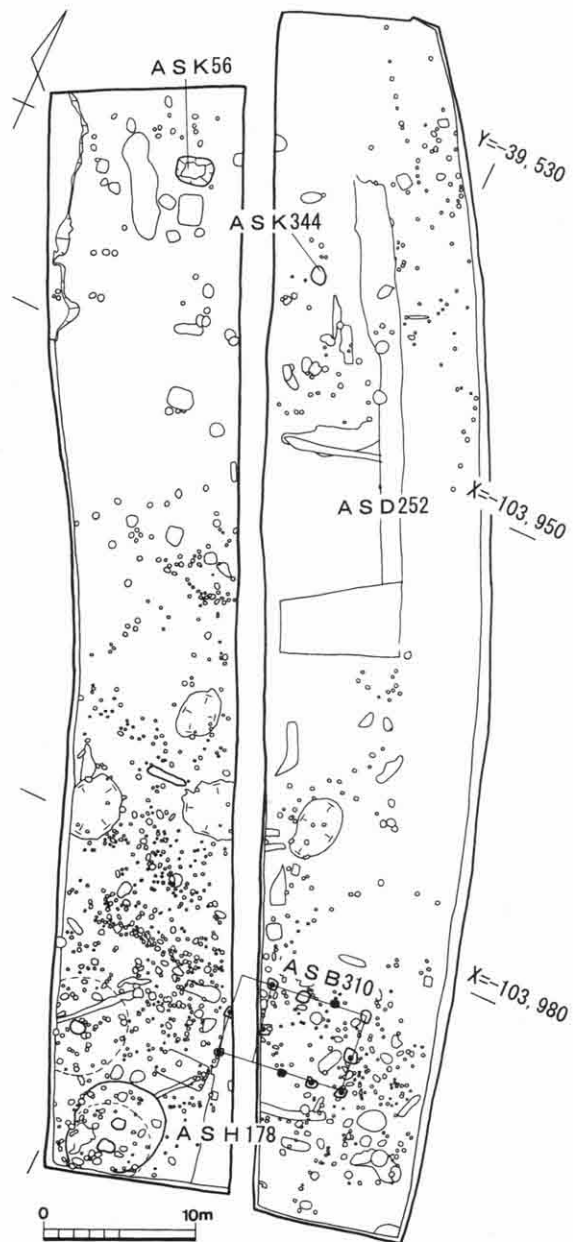
今回の調査成果から、この付近は弥生時代中期の居住域であったことが分かった。検出した遺構の密度から、居住域の北端にあたるものと考えられる。

柱穴群 調査地南半分に集中する。大半は、径0.2m前後を測り、奈良時代後半～平安時代にかけてのものと思われる。竪穴式住居跡A S H 178の北側約15mの所を東西方向に長さ約13m、幅約1mにわたって2条の柱穴が密集する。これより南側に円形の竪穴式住居跡が存在し、北側は遺構が希薄になる。この柱穴列が居住域の北限を限る柵列であった可能性もあり、今後検討を要する。

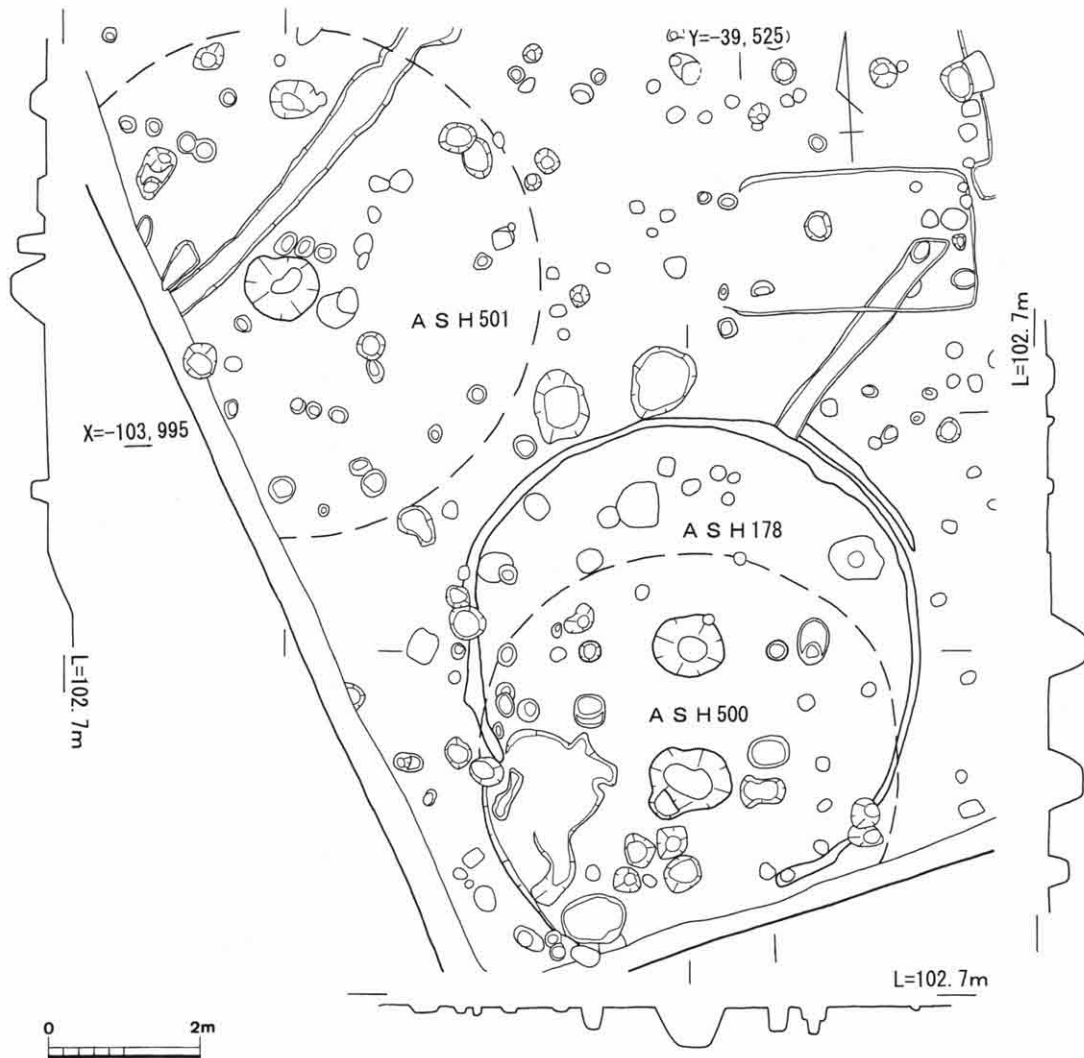
溝A S D 252 調査地北側を南北方向にのびる中世の溝である。遺構の性格は不明である。

時期不明の土坑 調査地南側で不定型な土坑を検出した。埋土が攪乱された状況であることから、風倒木痕と判断された。土坑内の埋土から縄文土器片が出土するものもある。

土坑A S K 56 調査地北側で検出した土坑



第7図 A地区遺構配置図



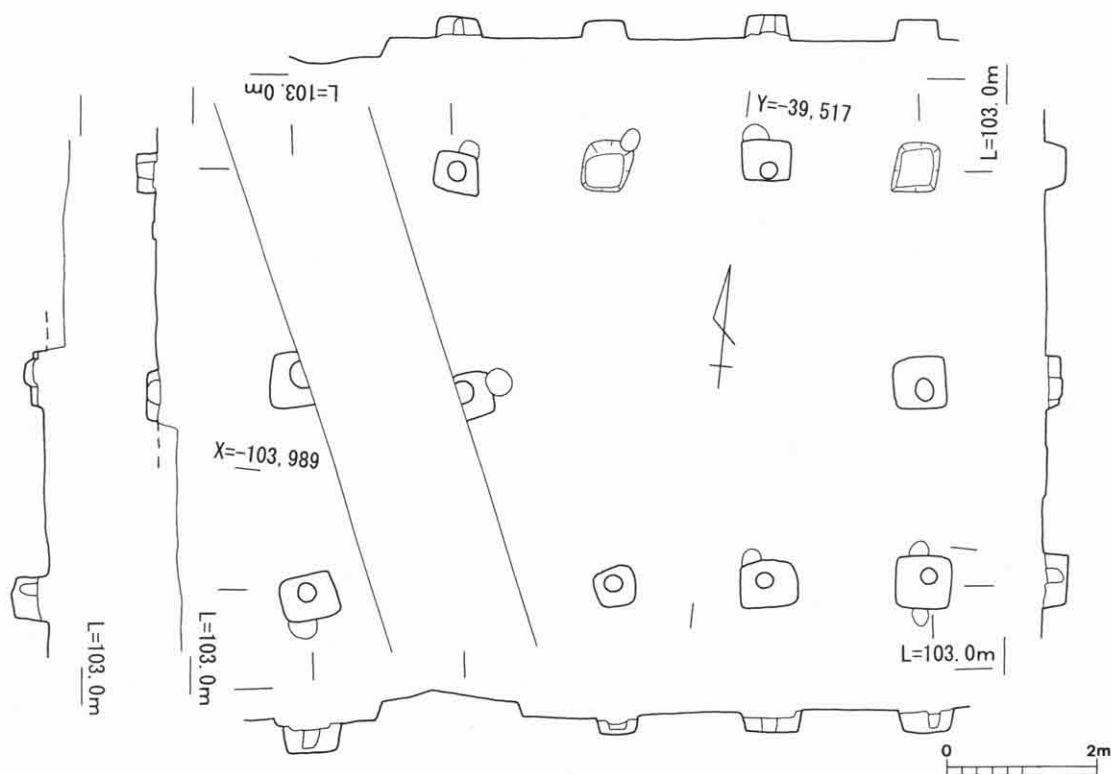
第8図 竖穴式住居跡A S H178・500・501実測図

である。土坑の規模は、 2.1×2.6 m、深さ約0.4mである。土坑内から弥生時代中期の土器がまとまって出土した。

土坑A S K 344 調査地北側で検出した土坑である。土坑の規模は、 1.1×0.7 m、深さ約0.2mである。土坑底から約0.1mの所に、厚さ0.1mの扁平な板石とともに縄文土器が出土した。墓の可能性もある。また、周辺の土坑からも縄文土器片が出土することから、今後の整理によって、その点数は増すものとする。

竖穴式住居跡A S H178 A地区南西隅で検出した円形の竖穴式住居跡である。わずかに周壁溝が残り、住居跡中央に土坑がある。住居の規模は、周壁溝から直径約6mで、中央土坑は直径約0.9m、深さ約0.5mである。主柱穴については、中央土坑から西側と東側1.2mの所に、対峙する形で柱穴が見られた。

竖穴式住居跡A S H500 A S H178と重複する形で検出した。住居西側のわずかな壁と中央土坑の検出から推定した。住居の規模は、径約5.5mを測る。中央土坑は、 1.1×0.8 m、深さ約0.5mである。主柱穴は不明である。



第9図 掘立柱建物跡ASB310実測図

竪穴式住居跡ASH501 竪穴式住居跡ASH178から北西約7mから検出した。中央土坑と約2.5m離れた所に円形に径約0.4mの柱穴がめぐることから、住居を想定した。住居の規模は、直径約6.5mを測る。中央土坑は1.0×0.8m、深さ約0.5mである。

掘立柱建物跡ASB310 調査地南側で検出した、西側に庇をもつ2間×3間の東西棟の建物である。柱掘形は、一辺0.5~0.7m、深さ0.2~0.3m、柱穴は0.2m前後である。主軸方向は、N82°Eを測り、距離は100m程離れるが、概ねC地区で検出した掘立柱建物跡に直交する。

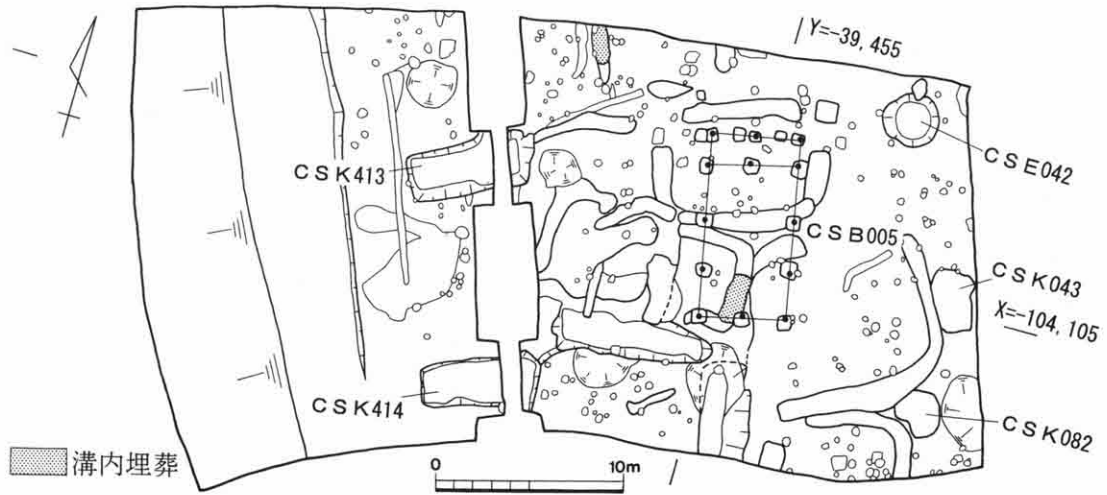
(2) C地区(第10~13図)

この地区からは、弥生時代中期と奈良時代後半~平安時代後半の遺構が重複する形で検出できた。遺構には、方形周溝墓・土坑・掘立柱建物跡・井戸・柵などがある。現在、調査地西側には、比高差4mほどの段丘地形が南北に通る。弥生時代にはこの段丘地形が東側から徐々に傾斜していたことが分かった。今回検出した遺構は段丘の際にあたる。

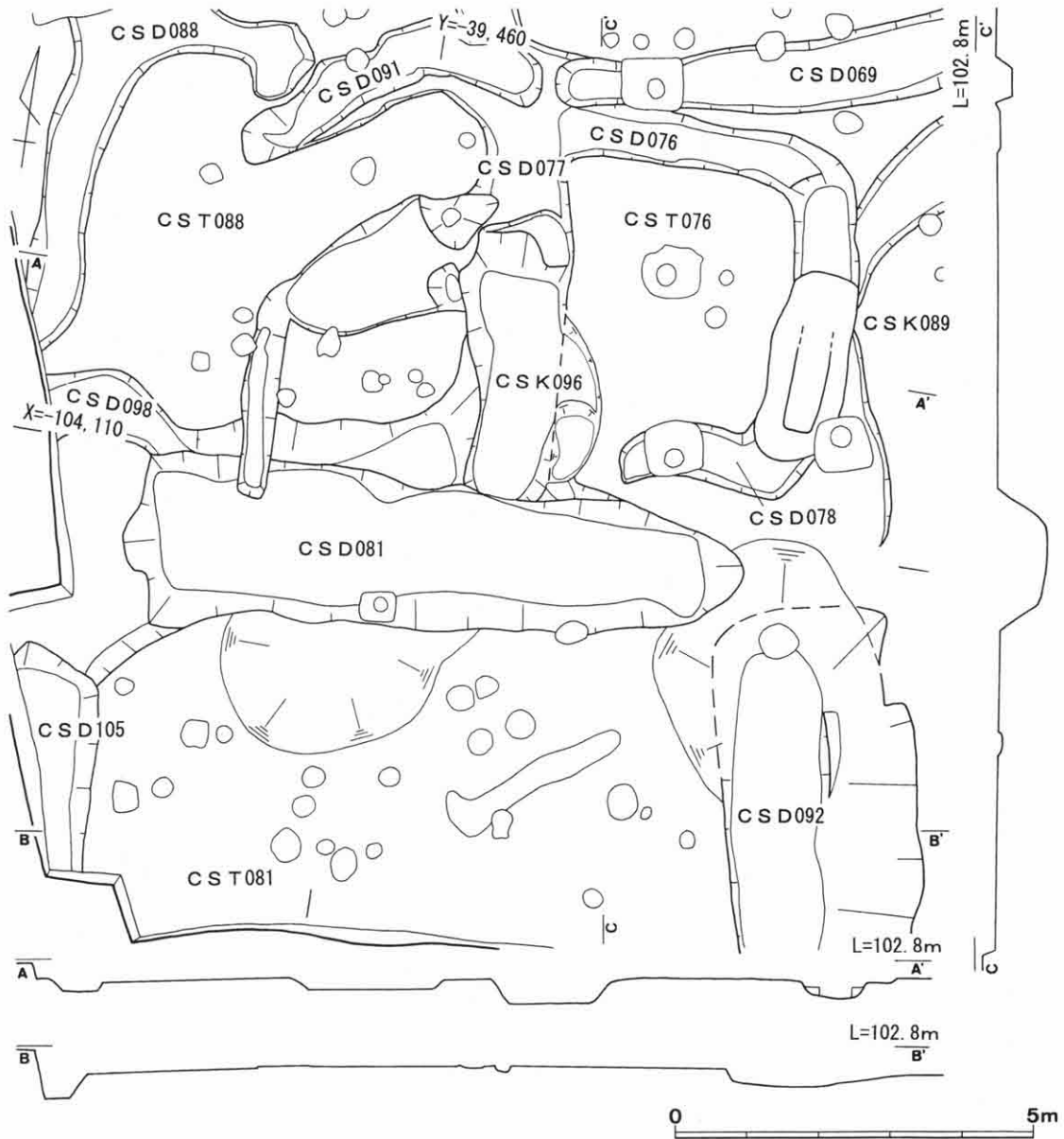
方形周溝墓CST076 調査地で最も小さい方形周溝墓である。規模は、一辺4mを測る。東側を区切る溝から土坑(CSK089)を検出した。2.2×1.1m、深さ0.25mを測る。西側においても土坑(CSK096)を検出した。3.6×1.5m、深さ0.3mを測る。前者は溝内埋葬であるが、後者については不明である。

方形周溝墓CST081 最も残りの良い方形周溝墓である。東西10m、南北5.5m以上である。幅2m以上、長さ8.5m前後の溝で囲まれた周溝内から弥生時代中期の土器が出土した。

土坑CSK043 調査地東側で検出した土坑である。非常に残りが悪く、規模は、3.5×2.2m、



第10図 C地区遺構配置図



第11図 C地区方形周溝墓群実測図

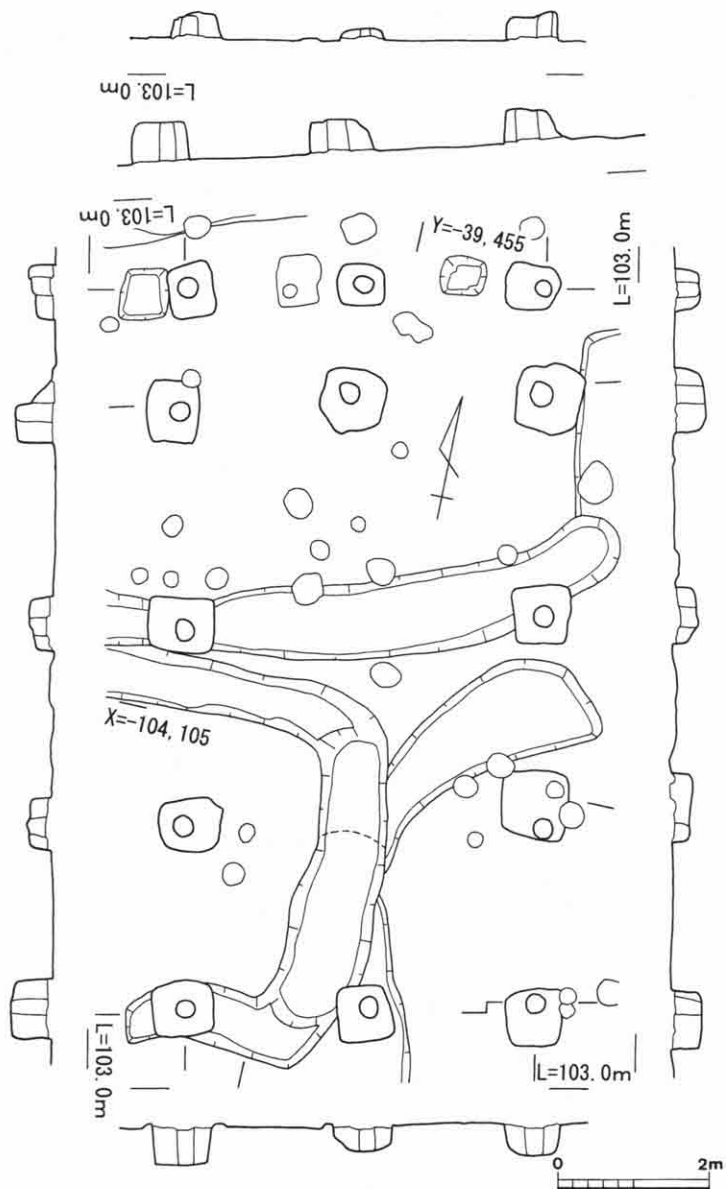
深さ0.1mである。弥生時代中期の土器片が出土した。

土坑CSK082 調査地南東隅で検出した不定形な土坑で2.5×2.5m、深さ約0.1mを測る。弥生時代中期の土器片が出土した。

土坑CSK413 調査地中央で検出した長方形の土坑である。6×2.8m、深さ約0.35mを測る。土坑内から弥生時代中期の土器片が出土した。東側の方形周溝墓を切る形で検出した。

土坑CSK414 調査地中央南側で検出した長方形の土坑である。4.2m以上×2.5mを測る。土坑内から弥生時代中期の土器片が出土した。方形周溝墓CST081の西溝である溝CSD105との関係については、現状では畦があるため不明である。

その他時期不明の土坑 方形周溝墓と重複する土坑を5基検出した。周溝の埋土と土色が類似するが、土坑内の埋土が攪乱された状況であったことから風倒木痕と考える。

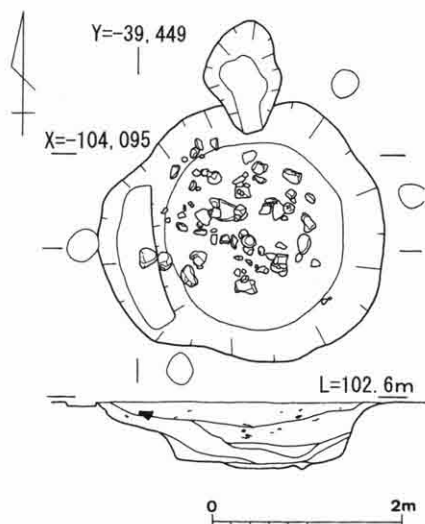


第12図 掘立柱建物跡CSB005実測図

掘立柱建物跡CSB005 調査地中央で検出した、北側に庇をもつ2間×3間の南北棟の建物である。柱掘形は、一辺0.6~0.8m、深さ0.3~0.5m、柱穴は0.3m前後であった。主軸方向は、N11°Wを測る。出土遺物はなかったが、建物北東で検出した井戸の埋土と同色であったことから、井戸と同じ時期と考える。

井戸CSE042 調査地北東隅で検出した。規模は直径約3m、深さ約0.7mを測る素掘りの井戸である。北側に導水したと思われる溝が付属する。埋土上層から、奈良時代後半~平安時代初頭にかけての土器が出土したことから、平安時代初頭に埋まったものと考えられる。

柵 掘立柱建物跡CSB005の北側と西・東側から建物に平行する柵が認められた。柵の長さは、北側が約11.2m、西側が約12.15m、東側が約10.4mである。



第13図 井戸 C S E 042実測図

柱穴群 径約0.2mの柱穴が見られ、なかには平安時代後半の土器片が出土するものもあった。この時期の建物跡も付近に存在すると考えられる。

4. まとめ

時塚古墳は、その築造時期は5世紀後半に求められ、千歳車塚築造以前の古墳であることが判明した。現在の馬路・千歳町を中心とした地域を支配した「有力者の墓」と考えられる。古墳の中心主体は削平を受けていたが、造出上の副次的な埋葬施設からの多量の鉄製品出土を考えると、全壊された中心主体にはそれ以上のものが副葬されていたと思われる。また、「時塚」という地名と今回発見した古墳

との関係については、今後の課題である。

時塚遺跡については、弥生～鎌倉時代にかけての複合遺跡であるとされていたが、今回の調査の結果、縄文～鎌倉時代にかけての遺跡であることが分かった。縄文時代の遺構・遺物は、遺跡北側のA地区付近に散見できる。弥生時代中期には、A地区付近が居住域、C地区付近が墓域として利用されていた。おもに弥生時代中期後半の遺物が占めるが、C地区出土遺物に中期前半の遺物も見られることから、余部遺跡と同時期の方形周溝墓があると想定される。検出した方形周溝墓の主軸方向から、概ね2種に分類できる。およそ真北を向く方形周溝墓C S T 076・088・081と、その周囲から検出したわずかに西に振る方形周溝墓である。これらが築造時期の違いによるものかどうかについては、現在整理中であるため、詳細については、今後刊行予定の調査概要で報告したい。なお、第8次調査として現在、府道東側の調査を実施している。さらに今後、今回の調査地付近が調査予定とされており、これらの調査に期待される。

(ふくしま・たかゆき=当センター調査第2課調査第1係調査員)

(おかざき・けんいち=当センター調査第2課調査第1係専門調査員)

注1 現地での御教示による。

注2 千賀久「日本出土初期馬具の系譜」(『檀原考古学研究所論集』第九 檀原考古学研究所) 1988

注3 中條英樹「鉄製f字形鏡板付轡の編年とその性格」(『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所) 2003

注4 若松良一「ヨコハケ調整円筒埴輪の技術史的検討—その細分と発展序列—」『諏訪山33号墳の研究』1987

注5 上田睦「古市古墳群出土円筒埴輪の様相」(『古代文化』第44巻第9号 (財)古代学協会) 1992

注6 南山城では宇治市五ヶ庄二子塚古墳でⅣ期とⅤ期の埴輪が共存し、埴丘上からTK23～47型式の須恵器が出土している。杉本宏・荒川史・福島孝行『宇治市文化財調査報告第3冊 五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告』宇治市教育委員会 1992

古代日本海沿岸地域における土器様相の比較検討(下)

筒井 崇史・村田 和弘・松尾 史子

1. はじめに

筆者らは、前号で、平安時代の日本海沿岸地域における土器様相について概観するとともに、当該期における丹後地域の土器様相の特色として、回転台成形で、底部の切り離しに糸切りを用い、かつ高台形状が平高台を呈する、いわゆる「椀」形態のものが、須恵器・土師器・黒色土器のいずれにも認められることを指摘した。また、こうした特色の土器がみられるようになるのは、平安時代中期(おおむね10世紀代と考える)以降と考えた。

本号では、上述ような特色を持つ土器について、その変遷と年代について検討を加えることにしたい。また、前号での検討結果と合わせて、伯耆地域から越前地域までの土器様相の併行関係やその特色についてもまとめることにしたい。

(筒井崇史)

2. 丹後地域における供膳具の検討

a. 土師器供膳具の検討

①土師器供膳具の分類

当該期の土師器資料を出土する遺跡には、京丹後市久美浜町女布北遺跡^(注1)・同網野町横枕遺跡^(注2)・同弥栄町縁城寺旧境内隣接地遺跡^(注3)・同大宮町五十河遺跡^(注4)・宮津市中野遺跡^(注5)・同日置北遺跡^(注6)・同成相寺旧境内遺跡^(注7)・同丹後国分寺隣接地遺跡^(注8)・舞鶴市倉谷遺跡^(注9)などがある。丹後地域の古代の土師器についてはすでに別稿で論じたことがあるが、8世紀後半から12世紀にかけてのおおまかな変遷について、改めてまとめておきたい。別稿では、丹後地域の土師器生産について製作技法や形態の変化から4つの画期、①回転台の導入、②深手杯の出現、③糸切りの導入、④椀・皿形態の出現、を捉えることができると指摘し、当該期の土師器を次の4つに分類した。

I 回転台成形で、畿内の土師器(杯A・皿A)を模倣するタイプ。赤彩する。暗文・ヘラ磨きを施すものがある。

II 回転台成形で須恵器杯を模倣するタイプ。暗文などの調整は施さない。形態・底部の調整方法によりさらに分類できる。

A 底部ヘラ切りの杯

1 平底で体部が直線的の外上方に立ち上がるもの。器高が低く、口径と底部径の差が小さい。

2 平底で底部がやや湾曲して斜め方向に立ち上がる。体部と底部の境をへら削りする。器高が高く、口径と底部径の差はⅡA1類よりも大きい。

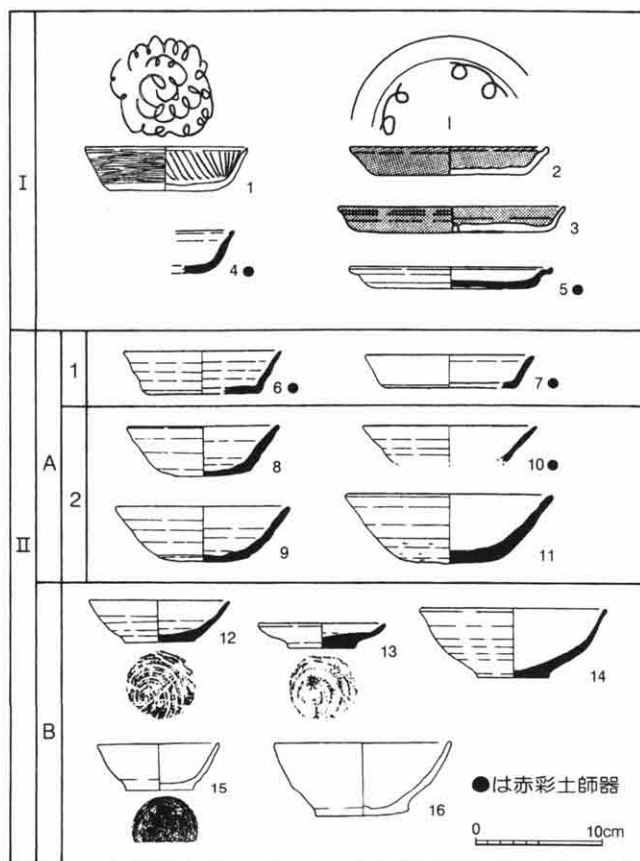
B 底部糸切りの杯・椀・皿

以下、上記分類をもとにそれぞれの画期や器種構成の変化から5期に分けて資料の検討を行う。なお、11・12世紀については丹後地域では良好な資料がないため、丹波地域の様相からも検討を加える。

②資料の検討

1期 土師器に回転台が導入されてからの資料で、横枕遺跡谷部下層(古相)および中野遺跡第4次出土資料がある。回転台成形で、Ⅰ類と、ⅡA1類の杯・皿がある。

2期 新たな器形として深手の杯が出現した段階の資料で、横枕遺跡谷部下層(新相)資料と日置北遺跡P3・4がある。回転台成形で、ⅡA2類の杯が主体で、大小の法量分化がある。横枕遺跡谷部下層出土資料は、共伴する須恵器の年代から8世紀後半～9世紀中頃までのもので、古い様相をもつ資料は1期に属すると考えられる。日置北遺跡出土資料は、形態がより須恵器に類似し、共伴する須恵器の年代から9世紀後半代のもと考えられる。倉谷遺跡SD9301礫層(中層)出土の土師器杯もこの段階のもと考えられる。



第1図 土師器分類図

- 1：大田鼻28号横穴 2・3：中野遺跡3次
 4～13：横枕遺跡2次 14：横枕遺跡1次
 15・16：女布北遺跡SX01

3期 土師器に糸切り技法が導入された段階の資料で、新しい器形として椀が出現する。横枕遺跡谷部中層、縁城寺旧境内隣接地遺跡土器溜まり、倉谷遺跡SD9301淡黒褐色土下層(上層)出土資料がある。ⅡA2類の杯と、ⅡB類の椀および杯が共伴する。杯はⅡA2類・ⅡB類いずれも法量は同じで、前段階の小型杯に対応する。椀は大小2種類ある。

4期 女布北遺跡SX01、成相寺旧境内遺跡出土資料がある。ⅡB類の椀および杯で構成される。杯は縁城寺旧境内隣接地遺跡土器溜まりよりも小型化している。椀は杯よりも一回り大きく、杯と椀が大小のセット関係にあるようである。

5期 この段階の資料としては中野遺跡第3次F1地区黒褐色土層、五十河遺跡SD21・22および丹後国分寺隣接地遺跡柱穴P1・2出土資料がある。土師器には、杯・皿・柱状高台があり、黒色土

器碗と共伴する。中野遺跡出土の杯は、4期の杯よりも口径が大きく器高は余り変わらないため、皿化したイメージがある。糸切りの小皿は、横枕遺跡谷部上層資料と法量・形態ともに類似する。4期の女布北遺跡や成相寺旧境内遺跡において、小皿が出土していないことから、小皿の出現はこの段階と考える方が妥当であろう。

この後、伊野近^(注11)氏によると、12世紀前半代には、加悦町桜内遺跡にみられるように平安京周辺の影響を受けた手づくねの土師器皿が加わり、13世紀後半代に回転台土師器は姿を消し、手づくねの皿と杯が主体となる。

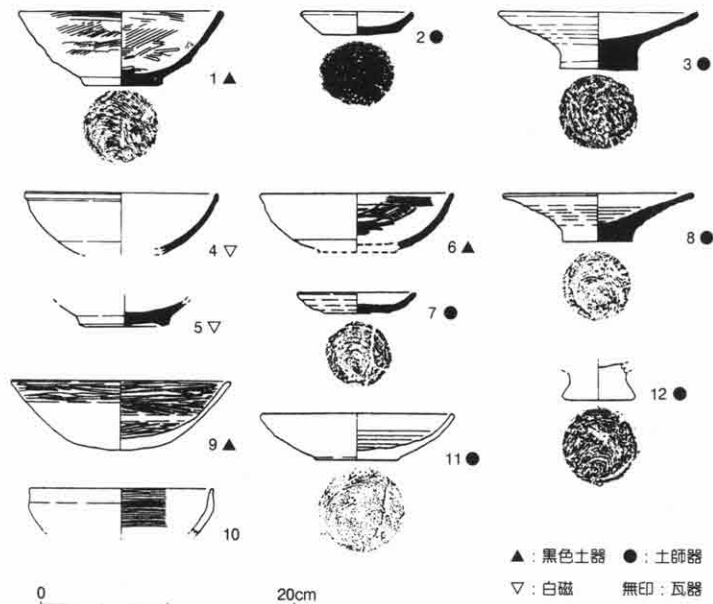
さて、前号で述べたように11世紀代の資料については丹後地域よりも丹波地域のほうが良好な資料に恵まれている。ここでは改めてその様相をみておきたい。代表的な遺跡としては、福知山市上^(注12)楽遺跡、綾部市青野西^(注13)遺跡・味方^(注14)遺跡、八木町池上^(注15)遺跡がある。

青野西遺跡 S D8801-a 出土資料は、回転台成形・底部糸切り碗で法量から大小に分けられる。口径は女布北遺跡とほぼ同じ幅にあるが、器高は明らかに低い。

上楽遺跡出土資料は、回転台成形で底部糸切りの碗・杯が主体である。皿はみられない。法量を検討すると、杯については縁城寺旧境内隣接地遺跡土器溜まりと同様のものと器高が低めのものがあり、丹後地域の土師器3期から4期にかけての資料に併行すると考えられよう。

味方遺跡出土資料は、回転台成形・底部糸切りの杯と皿で構成され、その割合は杯1：皿2である。碗はみられない。黒色土器碗と柱状高台杯・皿、白磁が共伴する。白磁の年代観から11世紀後半～12世紀の資料と考えられる。また、杯の法量を上楽遺跡出土資料と比較すると、器高はほとんど変わらないが、口径が大きくなっている。丹後地域の資料と比較しても同様に、土師器3期の資料より口径が大きく、器高は低い。

池上遺跡 S K271 出土資料は、回転台成形・底部糸切りの皿と杯で構成され、碗はない。黒色土器碗が共伴する。S E270 出土資料は、回転台成形・底部糸切りの皿と杯で構成され、碗はわずかにあるのみである。京都系土師器皿と黒色土器碗、柱状高台の杯が共伴する。京都系土師器皿の年代観から10世紀末ないし11世紀初頭のものと考えられる。法量を検討すると、京都系土師器皿と糸切り土師器皿はほぼ同じ口径で、糸切り土師器皿のほうが器高が高い。つまり器の深さに違いがある。杯については丹後地域の土師器5期の中野遺跡とほぼ同じで、味方遺跡・上楽遺



第2図 土師器5期の資料

1～5：五十河遺跡 S D21

6～8：丹後国分寺跡隣接地遺跡柱穴 P 1

9～12：中野遺跡 3次黒褐色土層

跡出土資料よりも一回り大きい。

年代的には池上遺跡の資料は上楽遺跡と味方遺跡の間に入ると考えられるが、法量からみると、その変化の流れに当てはまらない。その理由として、丹波地域北部と丹波地域南部では厳密には地域色が異なる可能性を考えておきたい。

以上のことから11世紀代には椀が姿を消していき、土師器は基本的に杯と皿から構成されるようになると考えられる。椀形態については、黒色土器や瓦器と役割を交替したと考えられる。このような丹波地域における土器様相は丹後地域の土師器5期にもみられることから、丹後地域においても同様の変化があるものと推察される。

③資料の年代について

まず、1期は共伴する須恵器の年代から8世紀後半頃のものと考えられる。2期は各遺跡の須恵器の年代から、おおよそ9世紀代のものといえよう。3期は、倉谷遺跡S D9301淡黒褐色土下層(上層)出土資料が丹波地域南部の亀岡市篠窯跡群の黒岩1号窯もしくは小柳4号窯の椀と共伴することから、10世紀前半代と考えられる。4期については年代を知り得る良好な共伴資料がなく、10世紀後半以降から5期が始まるまでの資料という相対的な位置づけにとどまる。5期については、いずれも柱状高台があり手づくねの土師器皿は出土しないこと、五十河遺跡出土資料が共伴する白磁椀の年代から11世紀中頃～12世紀前半と考えられることなどから、11世紀～12世紀にかけての資料と考えられる。ただし、手づくねの土師器皿の存否については地域や遺跡の性格によって異なる可能性があるため、今後の資料の増加を待って検討する必要がある。

各期の年代観をふまえて丹後地域の土師器の変遷についてまとめると次のようになる。

8世紀後半代には、都城の土師器を模倣して赤彩するものと、須恵器を模倣したものがあり、いずれも回転台で成形される。8世紀前半代には手づくねの土師器が存在することなどから、回転台は8世紀中頃～後半に導入されたと考えられる。

9世紀代になると、深手の杯が出現して主体となり、器形が在地化する。その背景には都城の土器を指向しなくなるのに伴い須恵器と区別する意図が働いた可能性が想定される。大小の法量分化がある。

10世紀前半代に底部の処理に糸切り技法が導入され、器形に椀が加わる。杯は前段階に比べ大型のものがなくなり、小型化していく。

最も小型化するの女布北遺跡や成相寺旧境内の段階と考えられる。

11世紀代には椀はなくなり、小皿が出現する。基本的に杯・皿を中心とする器種構成となる。杯はそれまでと系譜的にはつながらない皿化したものとなり、柱状高台の杯や皿などがみられるようになる。

(松尾史子)

b. 須恵器椀の検討

①北近畿地方・播磨地域における須恵器椀の分類

底部糸切りで、平高台を有する須恵器の供膳具は、基本的に「椀」形態をとり、丹後地域を中

心に但馬・若狭両地域を含む北近畿地方に分布するほか、丹波・播磨両地域では多数の生産窯が確認されている。丹後地域における須恵器碗の存在は早くから知られていたが、資料の量的な不足のため、これまで十分な検討は行われていなかった^(注18)。

北近畿地方・播磨地域では底部糸切りで平高台の須恵器碗が多数出土するが、それらは、形態的に大きく4器形に分類できる^(注19)(第3図)。碗Cは体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるものである。北近畿地方・播磨地域では各地で見られるが、丹後地域では特に主体的に分布する。碗Dは水引き成形の痕跡を明瞭に残し、口縁端部が玉縁状、または肥厚するものである。丹波地域南部の亀岡市篠窯跡群に特徴的な器形である。碗Eは碗Cに類似した形態であるが、見込み部分が大きくくぼむことから区別する。播磨地域を中心に分布する。碗Fは碗E同様、見込みのくぼみがみられるが、底部から丸みを帯びて口縁部に至るもので、碗Eなどに比べ深手な印象を与える。播磨地域南部に分布するが、碗C・D・Eに比べ時期的に新しく位置づけられる。以下では、丹後地域では主体的な分布をみせる碗Cのみを対象とする。各器形は、形態や技法的な影響を互いに強く受けたと考えられるが、その詳細については今後の検討課題である。

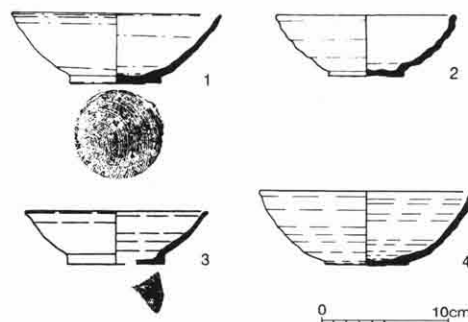
②資料の検討

碗Cは、丹後地域では、京丹後市峰山町名地谷遺跡^(注20)、舞鶴市浦入遺跡群^(注21)でまとまって出土しているが、他の遺跡ではそれほど多量の出土例があるわけではない。若狭地域では福井県大飯町吉見浜遺跡^(注22)でまとまって出土しているものの、ほかは少量の出土にとどまっている。また、但馬地域ではまとまって出土している例はなく、少数ずつの出土例があるだけである。碗Cは、良好な一括資料や層位資料もなく、また生産遺跡の調査もほとんど行われていないため、その変遷については不明な点が多い。

こうした点から、本稿では法量の検討を通じて碗Cの変遷について考えることにしたい。名地谷遺跡では、窯跡や灰原の2次堆積層などから多数の碗Cが出土しているが、その一括性は不明である。碗Cをその法量にもとづいてをグラフに図示すると、大きく4群に分けることができた(第4図1)。碗C以外の出土遺物としては、つまみをもたない蓋や高台を有する鉢などがあり、窯跡からは底部糸切りで、口縁部が「く」字状に屈曲する片口の鉢も出土している。また、未報告であるが、体部中位に突帯を有する碗も確認している。

浦入遺跡群では、製塩土器の廃棄層をはじめ、土坑や柱穴、包含層などから少数ずつ出土している状況であり、一括性の高い資料はない。そこで、包含層・遺構を問わず、報告されているすべての碗Cについて、その法量にもとづいてグラフに図示した。その結果、名地谷遺跡と同様に、大きく4群に分けることができた(第4図2)。

両者から、次のような点が確認できる。まず、第



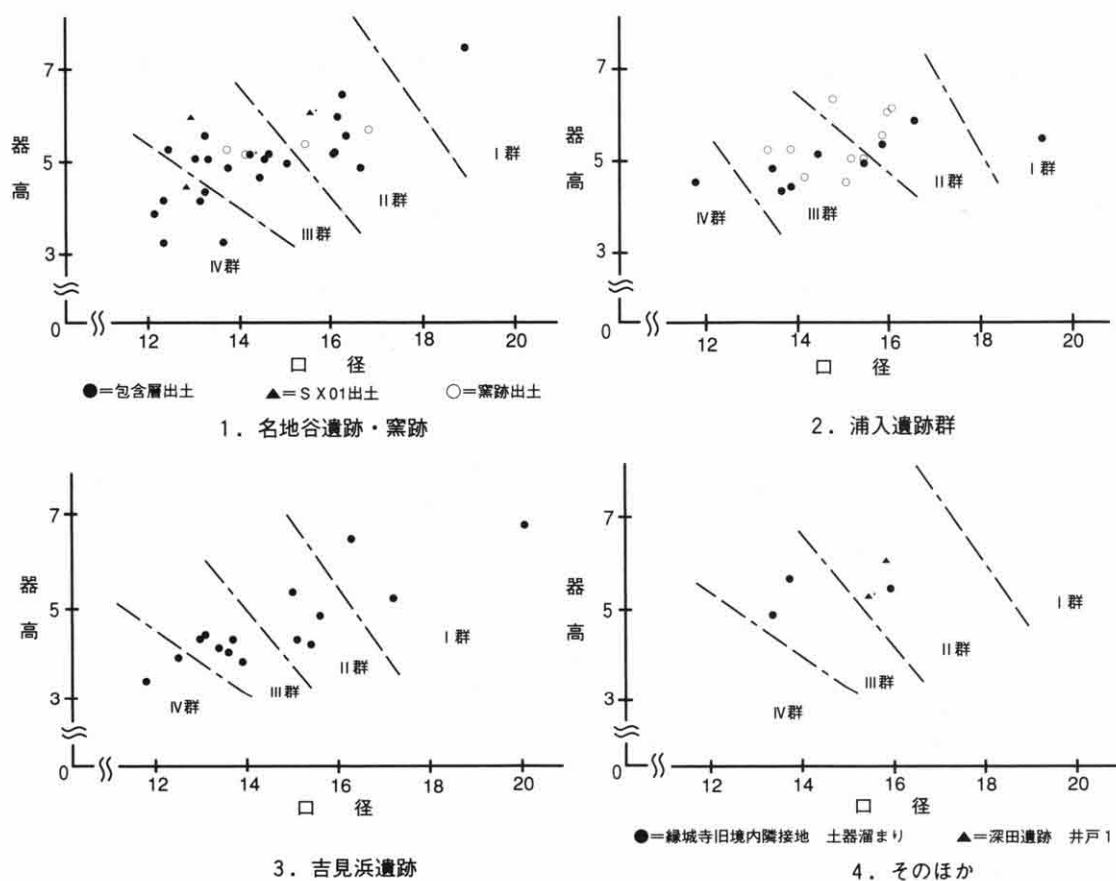
第3図 須恵器碗分類図

- 1: 碗C 2: 碗D 3: 碗E 4: 碗F
 1. 名地谷遺跡 2. 西長尾5号窯
 3. 中山窯跡 4. 大山荘金井畑Pit17

I群として口径18cm以上の大型品が少数ながら存在する。ただし、器高は一定しない。第III群は器高5cm前後に集中する一群で、第II群との境界が比較的明確である。その第II群は第III群よりも口径・器高とも一回り大きい一群である。第IV群は第III群との境界が不明瞭であるが、口径14cm以下、器高4.5cm以下の小型品と位置づけることができる。以上、碗Cが大きく4群に分けられることを確認した。

これら4群は何を表すのであろうか。一つには同時期における法量の違いにもとづく器種分化という理解である。今一つは、法量の縮小または拡大による変化という理解である。前者については、『延喜民部省式』年料雑器の^(注23)記事が参考になるのではないかと考えている。これは、尾張・長門両国が貢納すべき瓷器に関する記事である。この瓷器は緑釉陶器を指すと考えられ、器種名とともに口径の記載がある。それによれば、大碗=28.4cm、中碗=20.9cm、小碗=17.9cm、茶碗=14.9cm^(注24)。このことと先の法量分布図の成果を合わせると、第I群≒中碗、第II群≒小碗、第III群≒茶碗という対応関係があると考えられる。これは緑釉陶器に関する記述であるが、当該期の土器様相のもつ^(注25)特質を考えるならば、須恵器碗に緑釉陶器と同様な法量による区分が存在した可能性がある。このことは、第3図1にあるように名地谷窯跡の床面直上から出土した碗Cには第II群と第III群に属するものがあることからもうかがうことができる。なお、第IV群は対応するものの記述は『延喜民部省式』にはみられない。

次に、後者の問題であるが、両遺跡の碗Cを群別にみると、それぞれ口径の分布に広がりがある



第4図 須恵器碗法量分布図

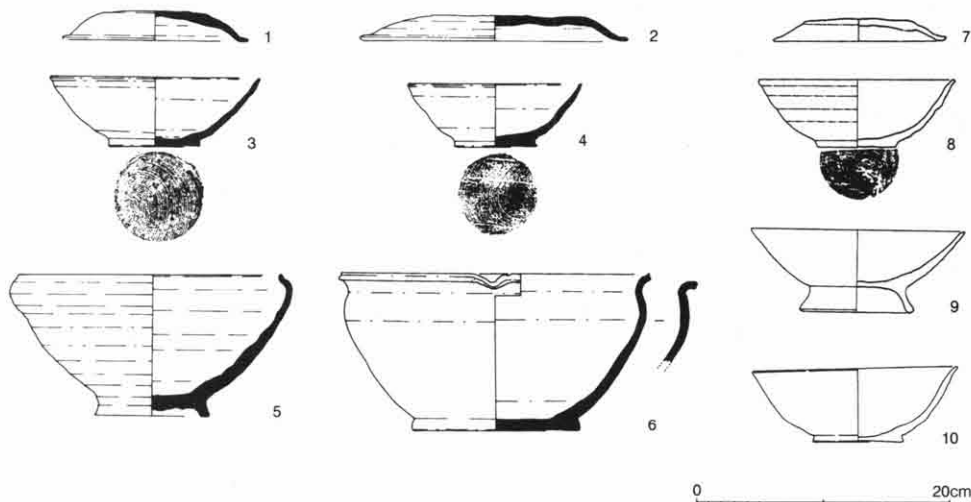
る。この広がり時間が時間差を表す可能性がある。ここで参考になるのが吉見浜遺跡出土資料である。吉見浜遺跡も、浦入遺跡群と同じく製塩遺跡であるため、遺物は包含層から出土したものしかなく、共伴関係や一括性に問題があるが、椀Cが出土している。これを法量にもとづいてグラフに図示すると、丹後地域の2遺跡同様、4群に分けることができる(第4図3)。しかし、全体的には丹後地域出土資料よりも法量が小さい。考古学的な検討による年代観は後述するとして、ここでは『延喜民部省式』年料雑器の記事から次のように考えたい。上述のように、この記事の内容が須恵器にも少なからず適合するとすれば、また、高橋輝彦氏が指摘するように、記事の内容が実際には9世紀前半代にさかのぼる可能性がある^(注26)とすれば、記事の内容に近い法量が認められる名地谷遺跡・浦入遺跡群が古く、それらよりも法量の縮小した吉見浜遺跡が新しいと考えることができる。この点は上述の土師器供膳具の法量が時期的に新しくなるにしたがって縮小するという現象と一致する。

以上の検討の結果、椀Cには、4群程度の法量による器種分化とその変化が認められた。ただ、いずれの資料も単純な一時期のものである保証はなく、ある程度の時間幅の存在が考えられる。特に丹後地域の2遺跡については表示した法量分布の中にすでに新古の存在する可能性が高い。

③資料の年代について

椀Cそのものに紀年銘などはなく、具体的な年代を得ることはできない。したがって、上記資料の年代については、共伴資料などの年代観から導き出すことにする。なお、浦入遺跡群出土資料は、上述のように出土遺構が複数におよぶことから以下の検討では除外する。

まず、名地谷遺跡の椀C(3・4)以外の出土資料から検討する(第5図)。つまみのない蓋(1・2)は、平安京に隣接する丹波地域南部の篠窯跡群の調査成果によると、小柳1号窯に出現し、西長尾3号窯には終焉を迎える。近年修正された年代観では、西長尾3号窯は9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられている^(注28)。遺跡出土の鉢(5)は口縁部の形状が特異で、篠窯跡群に類例はみられないが、底部高台を有するものは西長尾1号窯などにある。一方、窯跡出土の鉢(6)は摂津地域



第5図 須恵器椀Cと共伴する遺物

1～5. 名地谷遺跡 6. 名地谷窯跡 7～9. 吉見浜遺跡 10. 深田遺跡井戸1

の兵庫県三田市相野窯跡群などに類例がある^(注29)。また、口径が器高を上回るという点については、伊野近富氏分類の篠鉢Ⅱの特徴に近い^(注30)。このことから窯跡出土の鉢(6)は篠鉢Ⅱの出現する西長尾3号窯以降に位置づけられる可能性もある。底部に糸切り痕がみられる平高台状を呈する椀が出現するのも西長尾3号窯である。以上のように名地谷遺跡出土土器群の一部は西長尾3号窯出土土器群に近い内容をもつと考えられる。したがって、名地谷遺跡の年代の一点を10世紀初頭に置くことができ、窯跡の操業開始は9世紀代までさかのぼる可能性が高い。しかし、遺跡の存続期間の下限を示すような遺物を出土資料中から抽出することはできなかった。

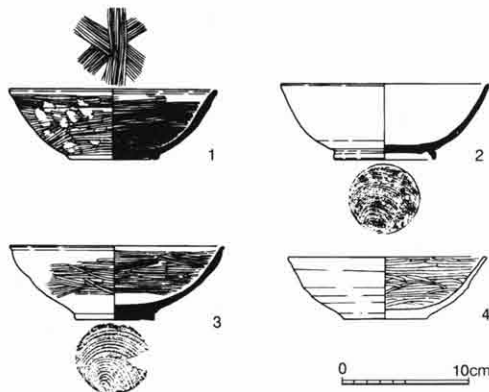
吉見浜遺跡出土資料では、椀C(8)以外の資料につまみのない蓋(7)や北陸地方によくみられる足高の高台をもつ椀(9)などがある。後者は越前地域の福井県宮崎村鉢伏窯跡群の報告で、この形式の須恵器椀の暦年代の一点を西暦890年と推定されている^(注31)。また、わずか2点だけの出土であるが、但馬地域の兵庫県日高町深田遺跡井戸1出土資料の年代観も参考になる^(注32)。井戸1からは名地谷遺跡出土の椀CⅡ・Ⅲ群に類似する須恵器椀(10)が出土しているが、この井戸のベースとなっている整地層からは寛平7年(895年)銘の木簡が出土している。したがって井戸1の年代は10世紀初頭以降と考えられる。吉見浜遺跡や深田遺跡における年代観は、名地谷遺跡における検討と矛盾するものではない。

以上のことから、丹後地域における須恵器椀Cの出現は、遅くとも10世紀初頭と考えられ、9世紀後半まで遡る可能性がある。しかし、その終焉については不明な点が多い。後述する黒色土器椀との共伴例がないことや篠窯跡における須恵器生産の終焉が11世紀初頭であることなどから、ここでは須恵器椀Cの終焉を10世紀末ないし11世紀初頭と推定しておきたい。

c. 黒色土器椀の検討

①北近畿地方における黒色土器椀の分類

底部糸切りで、平高台を有する黒色土器椀は、丹後地域を中心に分布し、周辺地域でも少なからず出土する。これまでの研究では、良好な一括資料や層位資料が少ないながらも、多くの成果



第6図 黒色土器椀分類図

- 1：椀A 2：椀B 3：椀C a 4：椀C b
 1・3. 池上遺跡第5次 土坑SK271
 2. 池上遺跡第5次 井戸SE270
 4. 左坂B9号横穴

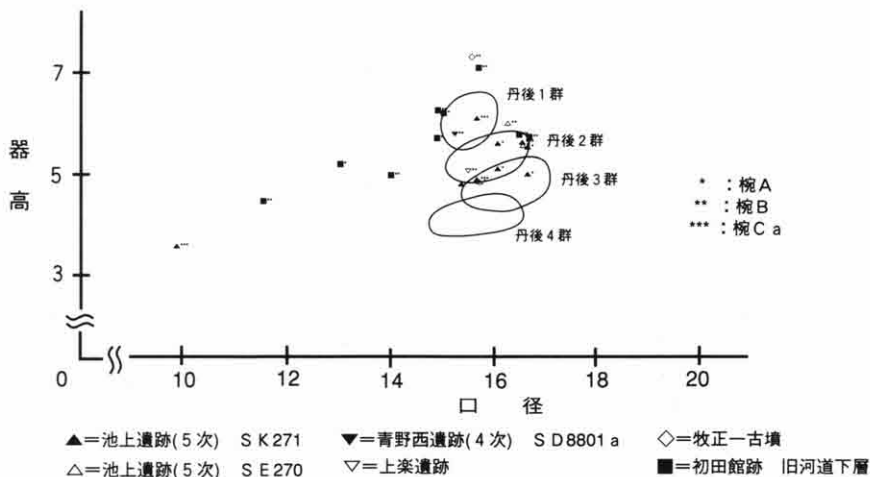
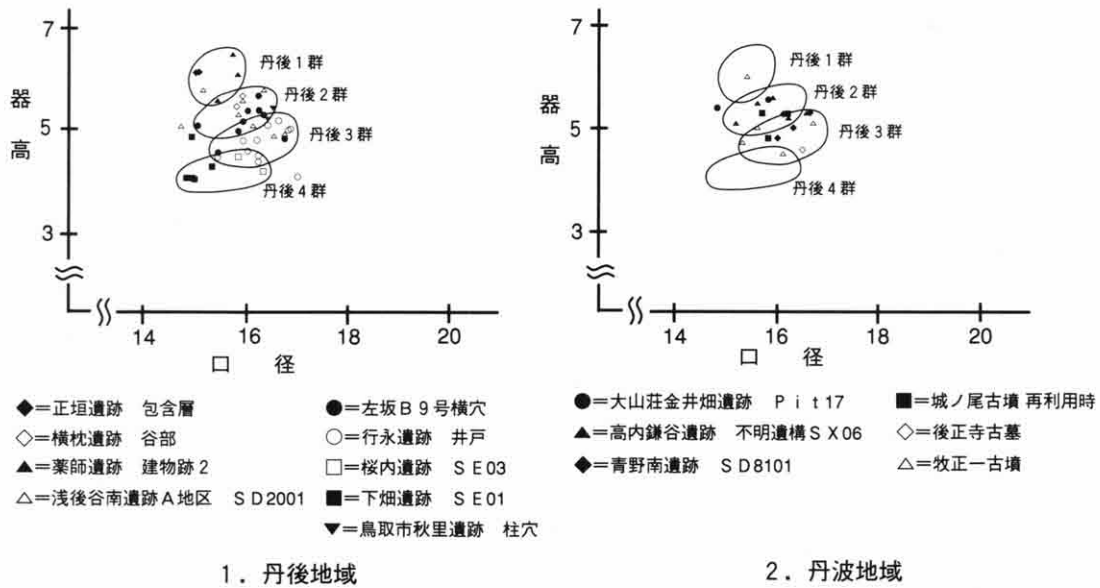
をあげてきた。しかし、1980年代後半以降の資料の増加に伴う検討は十分に行われていないのが現状である。

丹後地域をはじめ、北近畿地方で出土する黒色土器椀は大きく3器形に分類でき、さらに細分できる(第6図)。椀Aは回転台を使用せずに成形し、高台を貼り付けるもので、畿内系の黒色土器椀を在地で模倣したものと考えられる。丹後地域ではほとんど出土せず、丹波地域に分布する。椀Bは回転台成形で、底部の切り離しを糸切りで行ったのち、その周囲に高台を貼り付けるものである。丹後地域ではごく少量だが出土例がある。分布の

中心は丹波地域と考えられるが、量的には少ない。椀Cは、椀Bと同様、回転台成形で、底部の切り離しを糸切りで行うが、高台は平高台状を呈する。胎土・色調などからa、bに細分可能である。C aは内外面とも黒色処理を施している。丹波地域を中心に分布するが、丹後地域ではごくわずかししか出土しない。また、椀B同様、量的には少ない。C bは土師質で内面のみに黒色処理を施している。色調は黄褐色を呈することが多く、胎土に雲母を含む。丹後地域を中心に分布し、丹波地域北部まで広がる。以下では、この椀C bを対象として検討していく。なお、管見によると、椀A・Bはともに内外面とも黒色処理を施すものが多く、内面のみに黒色処理を施すものはわずかであった。この点については、都城周辺地域における内外面とも黒色処理を施した黒色土器(いわゆる黒色土器B類)の動向と連動して考えるべきであるが、今回は詳しくふれることはしない。

②資料の検討

ここでは、墳墓や井戸など、一括性を有するものを優先して取り上げた。これらは切り合い関



第7図 黒色土器椀法量分布図

	丹後地域	丹波地域北部	丹波地域南部
1群			椀A・椀B・椀C a
2群	椀C b		
3群			
4群			瓦器椀

第8図 黒色土器椀分布概念図

これに出土遺構をふまえて検討すると大きく4群に分けることができる(第7図1)。すなわち、京丹後市大宮町薬師遺跡建物跡2に代表される1群、同大宮町左坂B9号横穴に代表される2群、舞鶴市行永遺跡井戸に代表される3群、加悦町桜内遺跡SE03・野田川町下畑遺跡SE01に代表される4群に分けられる。これらは器高の高いものから低いものへ、すなわち1群から4群へと推移したと想定される。

次に丹波地域北部について同様の作業を行うと、その法量は口径14.5~17.0cm、器高4.5~6.0cmの範囲におさまる(第7図2)。これに丹後地域のグルーピングをそのまま重ねると、1群・4群はほとんどなく、2・3群に集中することが分かる。まず、2・3群の出土量が多いことについては、詳細な検討はできていないが、丹後地域を中心に分布する椀C bの分布圏が丹波地域北部に拡大したと解釈できるのではないだろうか。次に4群が存在しない点については、3群に含まれる福知山市後正寺古墳において椀C bと丹波型瓦器椀が共伴していることが参考になる。丹波地域北部は一般的に丹波型瓦器椀の分布圏と考えられていることから、4群の時期には椀C bは瓦器椀の分布圏の拡大によって丹後地域方面にその分布圏を縮小したと考えられるのではないだろうか。また、1群があまりみられない点については、黒色土器椀B・椀C aの存在を考慮する必要がある(第7図3)。椀Bや椀C aは量的に少なく、その変遷や年代観については不明な点も多いが、出土例から丹波地域を中心に分布している。丹波地域北部では、椀Bの法量はC b 1・2群のそれと同じ個体が多いことから、C b 1・2群に併行して存在する可能性を指摘しておきたい。また、椀C aも法量的には椀Bと同様で、丹波地域南部の八木町池上遺跡における出土状況から、椀Bと椀C aはほぼ同時期と考えられる。したがって、椀C aも椀C b 1・2群と併行して存在していた可能性が高いと考える。このことから椀C aと椀C bの関係は、不明な点も多いが別系統の器種であった。以上の点を図示すると第8図のように理解できる。

③資料の年代について

椀C bには紀年銘など、直接年代を示すような資料は存在しない。そこで、丹波地域の例も含めて、先の須恵器椀と同様に、共伴資料などの年代観から導き出すことにしたい(第9図)。

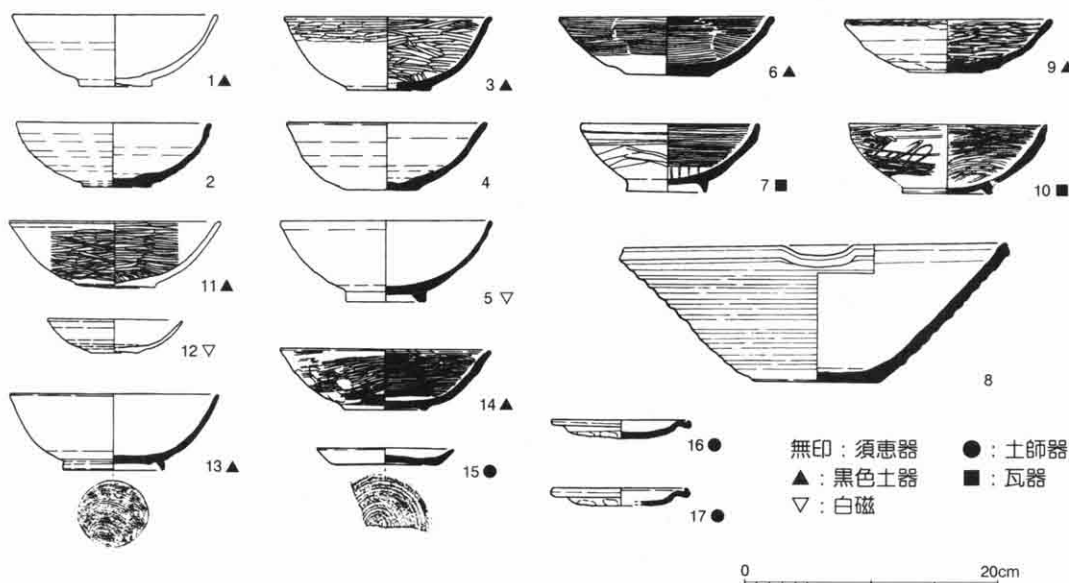
まず、椀C b 2群から検討する。これに該当する丹波地域の資料のうち、兵庫県篠山市大山荘金井畑遺跡Pit17や夜久野町高内鎌谷遺跡不明遺構SX06などで須恵器椀(2・4)との共伴例がある。この須恵器椀は、その形態などから、先に検討を行った椀Cではなく、播磨地域南部の神戸市西区神出窯跡群などで出土する椀Fに類似した資料である。同窯跡群出土須恵器を検討された

係や層位的な関係になく、遺構は単独で検出されたものである。そこで、遺構ごとの一括性と法量に着目して椀C bの変遷を考えることにしたい。まず、丹後地域出土の椀C bをその法量にもとづいてグラフに図示すると、その法量は、口径14.5~

森田稔氏の編年観^(注41)を参照すると、金井畑遺跡Pit17出土資料(2)は、神出Ⅰ期第1段階(11世紀後半)に、高内鎌谷遺跡不明遺構S X06出土資料(4)は、同第2段階(11世紀末～12世紀前半)に位置づけられる。さらに、後者では、白磁碗を伴うが、これは山本信夫氏のC期に相当する^(注42)。これらから碗C b 2群の年代はおおむね11世紀後半～12世紀初頭と考えられる。また、前号でもふれた鳥取県鳥取市秋里遺跡では掘立柱建物跡の柱穴から碗C b類似資料(11)や白磁皿Ⅳ類(12)などが出土している^(注43)。この碗の法量は、碗C bの2群と3群の交わりに位置するが、白磁皿の年代観は11世紀後半～12世紀前半と考えられ、丹波地域の出土例から導き出した年代観とほぼ一致する。

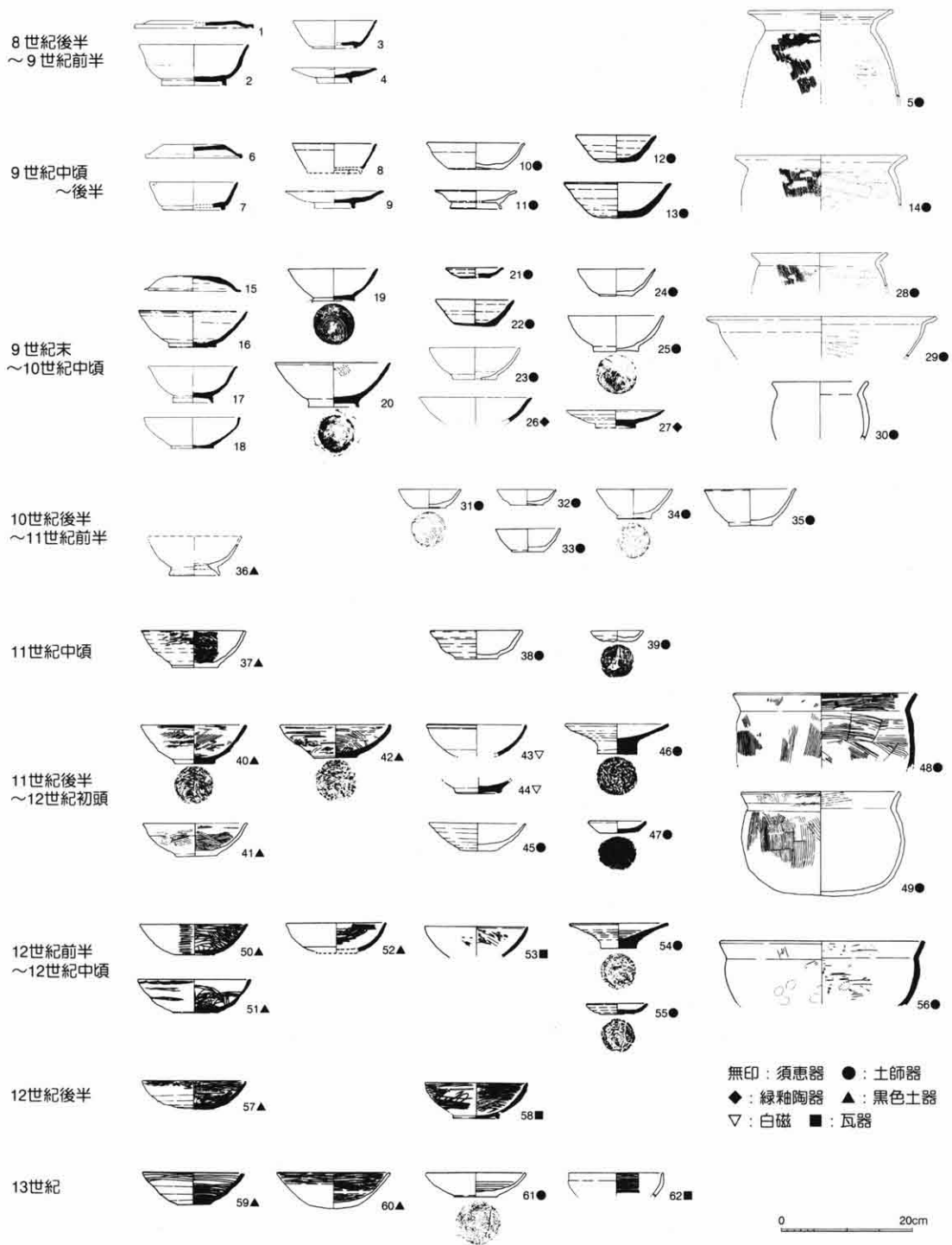
次に3・4群では、瓦器碗と共伴例が増えてくる。まず3群と4群の交わりに位置する桜内遺跡S E03では、碗C b(9)とともに丹波型瓦器碗(10)や白磁片が出土している。この瓦器碗を伊野近富氏は12世紀中頃に位置づけられている。また、3群の標式である行永遺跡井戸からも碗C bとともに、瓦器碗や白磁碗が出土している。担当者の吉岡博之氏は、これらの年代観を12世紀中頃に位置づけられている。また、後正寺古墓では、黒色土器碗(6)、瓦器碗(7)、須恵器鉢(8)が出土している。瓦器碗については伊野氏がやはり12世紀中頃に位置づけられている。須恵器鉢は森田氏の編年観によると、神出Ⅱ期第2段階(12世紀後半～13世紀初頭)のものと考えられる。これらから、3群は12世紀前半～12世紀中頃に、4群は12世紀後半～13世紀代に位置づけられると考えられる。

1群の年代は2群以前、すなわち11世紀前半～11世紀中頃と推定できる。ところで、丹波地域では碗C b 1群がほとんどみられず、碗Bまたは碗C aが存在することを指摘したが、これらが出土した八木町池上遺跡の資料は京都系土師皿(15・16)などの年代観から10世紀末頃の年代観が与えられている。したがって、1群は11世紀初頭、あるいは10世紀末頃まで遡る可能性がある。また、先に検討した須恵器碗Cと黒色土器碗C bの共伴例がない点は、前者の終焉と後者の出現



第9図 黒色土器碗C b年代推定関連遺物

- 1・2：金井畑遺跡Pit17 3～5：高内鎌谷遺跡S X06 6～8：後正寺古墓
 9・10：桜内遺跡S E03 11・12：秋里遺跡建物跡 12～17：池上遺跡S E270



第10図 丹後地域古代土器編年案

- | | | |
|-----------------------------|------------------------|------------------------------|
| 1～5: 倉谷 S D9301下層 | 6・7・9・14: 倉谷 S D9301中層 | 8・10・11: 日置北 P 4 |
| 12・13: 横枕谷部下層 | 15・16: 名地谷包含層 | 17・18・23・26～29: 倉谷 S D9301上層 |
| 19・20・24・25・30: 縁城寺旧境内土器溜まり | 21・22: 横枕谷部中層 | |
| 31・32・34・36: 成相寺旧境内 | 33・35: 女布北 S X01 | 37～39: 薬師掘立柱建物 2 |
| 40・42～44・46・48: 五十河 S D21 | 41・45・49: 左坂 B 9号横穴 | 50・51・53・56: 行永井戸 |
| 52・54・55: 丹後国分寺隣接地 P 1 | 57・58: 桜内 S E 03 | 59: 下畑 S E 01 |
| 60～62: 中野 (3次) 黒褐色土 | | |

を考える上で重要である。

以上のことから、丹後地域における黒色土器碗C bは、11世紀前半に出現し、4段階程度の型式変化を経た後に終焉を迎えるものと考えられる。ただし、その終焉時期を具体的に示す資料はなく、おそらく13世紀代であろうと推測できるに過ぎない。

(筒井崇史)

3. 丹後地域における古代土器様相の展開

前章まで、土師器・須恵器・黒色土器について、個別にその変遷と年代について検討してきた。土師器や黒色土器については、ある程度変遷を検討することができたが、須恵器については必ずしも十分な結果を得ることはできなかった。これまでの検討結果をまとめると、第10図のような編年観を提示することができる。しかし、明確な時期区分は、暦年代などを示す資料が不足していることから、ここではおおまかな年代観で土器様相の特色を述べるにとどめたい。また、詳しく触れることのできなかつた煮炊具についても簡単に述べることにしたい。

まず、9世紀代における丹後地域の土器様相の特色は、供膳具として奈良時代以来の土師器・須恵器を主体とし、平安京やその周辺で盛行する黒色土器や中国製陶磁器はごくわずかしみられず、緑釉陶器・灰釉陶器も出土例はあるものの、大量に出土するようなことはない。こうした状況のもとで、須恵器碗Cが出現してくると思われる。碗Cは先にもふれたように緑釉陶器との法量の類似性に着目するならば、その模倣品として生産されたとは考えられないだろうか。碗C以外の器種については必ずしも明確ではないが、つまみのない蓋や鉢などがある。ただ、他地域では独特な器形を呈することの多い壺類は、今ひとつ明確なものを確認できない。一方、土師器では8世紀後半には回転台が導入され(土師器1期)、9世紀代には都城系の杯は払拭されて在地化が進行する(土師器2期)。そして遅くとも10世紀前半には糸切り手法が導入される(土師器3期)。ただ、須恵器碗Cの検討結果からその時期は9世紀代まで遡る可能性もある。この時期の煮炊具は甕を主体とするが、鍋が次第に増加する。丹後地域で最も新しく甕を確認できるのは、倉谷遺跡S D9301上層(淡黒褐色土下層)出土資料で、10世紀前半に位置づけられており、これ以降、甕は見られなくなる。また、丹波地域では上楽遺跡で少量だが甕が出土しており、10世紀後半に位置づけられる。いずれにしても11世紀代には甕はみられなくなる。

10世紀後半になると、上楽遺跡や女布北遺跡出土の土師器碗・杯のように、土師器と須恵器の器形の同一化が進むようである。このような現象が須恵器生産の縮小・終焉期にみられることから、土師器生産の中に須恵器生産の技術・技法が取り込まれた結果ではないかと考えられる。また、上楽遺跡・女布北遺跡ともに須恵器や黒色土器の出土量が土師器に比べ著しく少ない。こうした点は地域色の可能性もあるが、このような土師器を主体とする土器様相が展開していたと考えられる(土師器4期)。しかし、時期や期間を具体的に示す資料がなく、前後の土器様相の年代観から、10世紀後半～11世紀初頭と推測できるにすぎない。また、この時期の土師器の煮炊具の動向については不明な点が多い。

遅くとも11世紀初頭に須恵器の生産が終了し、その後、新たに黒色土器、特に椀C bの生産が開始される。このことによって、丹後地域における土器様相は新たな展開をみせる。椀C bの出現年代は、現時点の資料による限り、11世紀前半と推定できるが、これよりも古く遡る資料がみられないのは、瓦器椀の出現と相前後して出現した可能性を示唆しているように思える。つまり、椀C bの出現は、直接的には、丹波地域に分布する椀Bや椀C aの技術的な影響を受けて成立したと考えられるが、こうした黒色土器椀の出現自体、畿内における瓦器椀の出現と連動した土器様相の変化と考える必要があるのではないだろうか。また、椀C bの資料的な増加が認められるようになるのは11世紀後半である。11世紀後半～12世紀代にかけては、椀C bや土師器椀・大皿・小皿・鍋と中国製陶磁器、特に白磁椀からなる土器様相が明確になってくる。搬入品としての丹波型瓦器椀もみられるが出土数はそれほど多くない。煮炊具でも土師器鍋が主体で、少量の瓦質土器の鍋がみられる程度である。したがって、白磁椀などの中国製陶磁器が広域に流通する一方で、供膳具、特に土器椀は、森隆氏が言われるように旧国程度を1つの単位とする土器様相の展開が考えられる^(注48)。なお、丹波地域や播磨地域にみられるような体部外面にタタキ痕を残す甕はほとんどみられない。

ところで、「丹後型黒色土器椀」^(注45)の名称は、上述してきたように、11世紀以降の丹後地域の土器様相の特色というべき黒色土器椀C bに対してのみに与えるべきであると考えられる。黒色土器椀C bの特色としては、回転台成形で底部の切り離しに糸切りを用い、平高台ないし平底を呈する器形は畿内とその周辺で盛行する瓦器椀とは全く異質の器形であること、瓦器椀やそれに先行する内外面とも黒色処理を施した黒色土器椀とは異なり、内面のみを黒色処理をしていること、さらに丹波地域北部にも若干分布するものの、ほぼ丹後地域のみ分布することなどがあげられる。これらの特色によって、近隣の土器椀とは明らかに分離され、独自の地域色を示す。そしてこの椀C bは、高橋美久二氏によって「地方色のある瓦器」と評価された^(注46)ものであり、あくまでも畿内やその周辺で盛行する瓦器椀の、丹後地域におけるカウンターパートであると理解しておくべきであろう。

4. 日本海沿岸地域における古代土器様相の展開

前号では日本海沿岸地域における土器様相の特色とその年代観について検討し、本号では丹後地域における代表的な供膳具の変遷と土器様相の展開について検討してきた。共同研究報告の締めくくりとして、これまで検討を行ってきた資料の併行関係と土器様相の展開について整理を行うことにしたい。

まず、併行関係を示す資料については、中国製陶磁器や施釉陶器、あるいは瓦器の例を除いて、具体的な資料はほとんど提示することはできなかつた。これは、各地の土器様相の主体となる供膳具の生産が在地化するとともにその移動が広範囲におよばないためと考えられる。しかし、製作技法や器形の特徴などから、ある程度の併行関係を推測することは可能である。特に前号ではこのような視点からいくつかの併行関係の可能性をすでに指摘している。また、本号での丹後地

	伯耆国	因幡国	但馬国	丹後国	丹波国	若狭国	越前国
8世紀 前 中 後	伯耆国庁包含層		但馬国分寺SD01	(丹後半島)	(北丹波)		
				横枕谷部下層(古相)		(南丹波) 石原畑3号窯 西長尾1号窯	
				横枕谷部下層(新相)		小柳1号窯 石原畑1・2号窯 西長尾3号窯 前山2・3号窯	西瀬手下遺跡*
9世紀 前 中 後	伯耆国庁SD37 伯耆国庁濠 伯耆国庁SK05	因幡国府*・若吉遺跡*	深田窪地下層 深田窪地中層 祢布ヶ森井戸	倉谷SD01下層			北市遺跡 猪野口南幅遺跡
				倉谷SD01中層・日置北P4		黒岩1号窯 小柳4号窯	鉢伏窯跡群
				倉谷SD01上層		西長尾5号窯 池上 SE270・SK271	下糸生脇遺跡 下六条西九反田
10世紀 前 中 後	伯耆国庁SD38・SD39 上淀麿寺焼土層	山ヶ鼻SK14-1期 山田12号窯 山ヶ鼻SK14-2期 山ヶ鼻SK14-3期 山ヶ鼻SK14-4期	深田井戸1	名地谷遺跡・横枕谷部中層・縁城寺旧境内	中山窯跡	吉見浜遺跡*	
				女布北SX01	味方 SK19		
				薬師建物2	金井畑 Pit17		
11世紀 前 中 後	米子城 SK51・SK32			成相寺旧境内			
				左坂B9号横穴 五十河SP21・22	高内鎌谷 SX06		
				桜内 SE03	青野南 SD8101		
12世紀 前 中 後	(打塚遺跡) (錦町第1遺跡)	秋里SB01-P3 山ヶ鼻SK14-5期 (秋里SK16)		行永井戸			
				中野3次黒褐色土	里SD02		
13世紀 前 中 後	(青木 H5X69)	山ヶ鼻SK14-6期 (菖蒲 SK01)		下畑 SE01			

*: 存続年代が長期間にわたる遺跡 (): 年代が推定による遺跡

第11図 日本海沿岸地域土器編年表

域における供膳具の年代観も同様の視点から導き出している。以上の点から第11図のような併行関係を提示することにした。

さて、今回の検討で対象とした8世紀後半から12世紀にかけての平安京周辺における土器様相は、律令的な土器様相から、中国製陶磁器を頂点とし、国産の施釉陶器類、黒色土器・須恵器・土師器から構成される土器様相へと移行し、さらに黒色土器碗から発展してきた瓦器碗を主体とする中世的な土器様相の成立という展開をみせる。このような平安京周辺における土器様相の展開、変化は、各地の土器様相に大きな影響を与え続けたと考えられる。

以下では、丹後地域と同様に大まかな年代観ではあるが、日本海沿岸地域における土器様相の特色について述べる。まず、9世紀から10世紀にかけての各地の土器様相は、これまでの検討から旧国を単位として展開しており、その影響や土器の流通も広範囲には及ばず、せいぜい隣接する諸国にとどまるようである。このことから、斉一的であった律令的な土器様相というものが解体するとともに、土器生産の在地化が大きく進展したと考えられる。たとえば、須恵器生産の終焉時期が地域ごとに異なっているのは、在地での需要状況に影響された、須恵器生産の在地化が大きな原因と考えられる。また、土師器も地域ごとの特色が比較的明確にみられることは、これまで述べてきたとおりである。これに対して、中国製陶磁器や施釉陶器は、奢侈品として全国的な流通状況を示す。つまり、各地の土器様相は、主体となる在地的な須恵器・土師器と奢侈品である中国製陶磁器や施釉陶器から構成されことになるが、後者の出土量は遺跡の性格によって大きく異なる。また、須恵器や土師器の中には、本稿で指摘した緑釉陶器碗が須恵器碗Cとして模倣された可能性や、伯耆・因幡地域などにみられる灰釉陶器皿を模倣した土師器皿など、平安京周辺で盛行する土器を模倣するものがみられることから、それぞれの地域間の交流よりも、平安京周辺と各地域の間での交流が活発であったことを示していると考えられる。しかし、在地色をもつ須恵器や土師器を技術的な点からみると、回転台成形と、糸切り手法による切り離しという技法が、器形や土器の種類の違いを越えて大きく展開している事実には注意する必要がある。つまり、器形などの形態上の相違や器種構成の相違が旧国を単位とする土器様相というものを規定しているが、一方では、その技術的・技法的な共通性は高い。このようなことがいかなる理由によって生じたのか、現時点では明確な解答は用意できないが、今後とも注意していきたい課題である。

次に、11世紀から12世紀にかけての各地の土器様相は、丹後地域における黒色土器碗C bの検討の際に指摘したように、畿内地域における瓦器碗の出現と大きく関わる可能性を考えたい。ただ、丹後地域をはじめ、伯耆・因幡・丹波の各地域では、10世紀から11世紀にかけての土器様相の展開が不明瞭となる。また、但馬・若狭・越前の3地域では、10世紀以降、資料数の少なさから、土器様相の展開を追跡していくこと自体が困難となる。このように日本海沿岸地域では10世紀以降、土器様相の詳細を知ることが困難となり、次に具体的な土器様相の展開を知ることが可能となるのは、北宋成立(960年)以降に生産された中国製陶磁器(白磁・青磁など)が大量に輸入される11世紀後半以降である。これらは、平安京や太宰府の周辺にとどまらず、全国各地で多数

の出土が知られ、中世的土器様相の特色の1つとみることができる。

今回は、丹後地域における土器様相の展開について若干の検討を試みたが、他地域の様相については十分行うことはできなかった。すでに11世紀以降の各地の土器様相の展開については先行研究も多く、詳細はそちらに譲ることとしたい。最後に今回の検討を通じて新たに気付いた点を2点指摘しておきたい。

1点目は、伯耆地域では、近年、11世紀代の黒色土器碗資料が知られるようになってきた^(注47)。これは、量的にはまだ十分とはいえないが、この時期に増加していくこと^(注47)の背景として、丹後地域同様、畿内における瓦器碗の出現に影響を受けた可能性もあることを指摘しておきたい。

2点目は、鳥取市秋里遺跡における黒色土器碗C b類似資料の存在からうかがわれる丹後地域と因幡地域の交流である。その具体的な内容は全く不明であるが、今後、解明すべき課題として注意しておきたい。

5. おわりに

(上)・(下)2回にわたり、「古代日本海沿岸地域土器様相の比較検討」と題して、鳥取県・兵庫県北部・京都府北部・福井県の平安時代の土器様相について比較、検討を行ってきた。本稿において、丹後地域の土器様相の特色と変遷を明らかにする^(注47)とした目的については、現時点では、おおむね達し得たのではないかと思う。しかし、本文中においてもたびたび述べているように、丹後地域においてこうした編年作業を進めて行くには、出土した土器資料の数は、決して十分なものとはいえず、今後の資料の増加に期待するところが大きい。また、丹後地域と日本海沿岸地域の土器様相との比較検討を通じて、いくつかの課題も明らかになったが、これらについては今後、検討していきたい。

今回の報告によって、今後、丹後地域ならびに日本海沿岸地域の土器編年に対する議論が深まることを期待して、本報告のおわりとしたい。

(筒井崇史・村田和弘・松尾史子)

(つつい・たかふみ=当センター調査第2課調査第2係調査員)

(むらた・かずひろ=当センター調査第2課調査第1係調査員)

(まつお・ふみこ=京都府文化財保護課技師)

謝辞 共同研究の期間中のみならず、様々な機会を得て日本海沿岸地域の出土土器について資料調査を実施した。この間、多くの方々にお世話になった。文末であるが芳名をあげて謝意を表したい(敬称略・順不動)。

岸岡貴英・下仲隆浩・鷺巣孔亮・赤沢徳明・奥村牧弘・松村英之・加賀見省一・平田学・岸本浩忠・根鈴輝雄・谷口恭子

注1 筒井崇史「女布北遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

- 注2 松尾史子「横枕遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注3 横島勝則ほか『縁城寺旧境内隣接地遺跡発掘調査報告書』(『京都府弥栄町文化財調査報告』第13集 弥栄町教育委員会) 1998
- 注4 引原茂治「五十河遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第94冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注5 中寫陽太郎『中野遺跡第1次発掘調査概要』(『宮津市文化財調査報告』第2集 宮津市教育委員会) 1980、中寫陽太郎ほか『中野遺跡第2次発掘調査概要』(『同』第3集 同市教育委員会) 1981、中寫陽太郎『中野遺跡第3次発掘調査概要』(『同』第5集 同市教育委員会) 1982、中寫陽太郎『中野遺跡第4次発掘調査概要』(『同』第7集 同市教育委員会) 1983
- 注6 中寫陽太郎『日置地区第3次発掘調査概要』(『宮津市文化財調査報告』第10集 宮津市教育委員会) 1985
- 注7 中寫陽太郎「成相寺旧境内地出土の土器」(『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会) 1992
- 注8 中寫洋太郎「史跡丹後国分寺跡隣接地遺跡発掘調査概要」(『宮津市文化財調査報告』第17集 宮津市教育委員会) 1989
- 注9 松本達也『倉谷遺跡第2次発掘調査概要報告書』(『舞鶴市文化財調査報告』第23集 舞鶴市教育委員会) 1994
- 注10 松尾史子「丹後地方の平安時代の土器」(『中近世土器の基礎研究』ⅩⅤ 日本中世土器研究会) 2000、同「丹後地方の回転台土師器」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注11 伊野近富「中世土器の編年(中)」(『京都府埋蔵文化財情報』第59号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注12 永谷隆夫「上楽遺跡(猪崎地区)発掘調査」(『福知山市文化財調査報告書』第33集 福知山市教育委員会) 1997
- 注13 引原茂治「青野西遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注14 近澤豊明「味方遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第19集 綾部市教育委員会) 1993
- 注15 中川和哉ほか「池上遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注16 石井清司ほか『篠窯跡群Ⅰ』(『京都府遺跡調査報告書』第2冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984、岡崎研一ほか『篠窯跡群Ⅱ』(『京都府遺跡調査報告書』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 注17 このほか「杯」と呼びうる、やや小型のものが存在する。ただ、「椀」と「杯」の区別は、形態的には明瞭ではなく、あくまでも法量上の相違と考え、以下では、両者を区別せず「椀」として一括りにして検討を行う。ただし、律令期の土器と同様に、法量の差違が器種あるいは器形を規定している可能性は高い。したがって法量上の相違は重要な意味を持つものと考えたい。
- 注18 須恵器椀を検討の対象としたものとしては、以下のものがある。おそらくこの地域の須恵器椀を扱ったものとしては岸岡貴英氏の2編の論文に限られる。

- 岸岡貴英「京都府北部の平安時代の須恵器生産」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 岸岡貴英「名谷窯跡と名地谷遺跡出土須恵器の再検討」(『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会) 2001
- 注19 ここでの器形分類は、筒井崇史「飛鳥～平安時代の土器」(『浦入遺跡群』(『京都府埋蔵文化財調査報告書』第29冊) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001)に準じており、椀A・椀Bは奈良時代の椀形態のものを指す。また、椀E・椀Fは本稿で新たに設定した。
- 注20 細川康晴「名地谷窯跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1998)』 京都府教育委員会) 1998、岸岡貴英「名地谷遺跡第2次」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1999)』 京都府教育委員会) 1999
- 注21 田代弘・筒井崇史ほか『浦入遺跡群』(『京都府埋蔵文化財調査報告書』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001、吉岡博之・松本達也ほか『浦入遺跡群発掘調査報告書 遺構編』(『舞鶴市文化財調査報告』第33集 舞鶴市教育委員会) 2001、吉岡博之・松本達也ほか『浦入遺跡群発掘調査報告書 遺物編』(『舞鶴市文化財調査報告』第36集 舞鶴市教育委員会) 2002
- 注22 森川昌和・大森宏ほか『吉見浜遺跡』(大飯町教育委員会) 1974
- 注23 『延喜民部省式』燃料雑器には次のようにある。
尾張国瓷器。大椀五合。径各九寸五分。中椀五口。径各七寸。小椀・。径各六寸。茶椀廿口。径各五寸。(以下略)
なお、『延喜式』は西暦927年撰進、967年に施行された。
- 注24 1寸=2.984cmとして計算した。
- 注25 『延喜式』が編纂された9・10世紀の土器様相は、宇野隆夫氏によって「王朝国家的食器様式」と評価された中国製陶磁器を頂点とし、漆器、施釉陶器、黒色土器、須恵器、土師器という階層的な食器構成をとり、中国製陶磁器を施釉陶器や黒色土器で模倣する「陶磁器指向」が大きな特色である。こうした「陶磁器指向」から器形の模倣だけではなく、法量や器種構成なども模倣された可能性を考えたい。
- 注26 高橋輝彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」(『史林』第77巻第6号 史学研究会) 1994
- 注27 注17石井清司ほか文献、石井清司「篠産須恵器」(『概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会) 1995
- 注28 石井清司「篠窯の実年代」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注29 岡崎正雄ほか『相野窯跡群』(『兵庫県文化財調査報告書』第115冊 兵庫県教育委員会) 1992
- 注30 伊野近富「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第37号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注31 水村伸行『鉢伏2・3号窯址灰原発掘調査概報』(『福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報』3 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター) 1990
- 注32 吉識雅仁『深田遺跡・カナゲ田遺跡』(『兵庫県文化財調査報告書』第99冊 兵庫県教育委員会) 1991
- 注33 岸岡貴英「薬師遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注34 筒井崇史「左坂横穴(B支群)」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

- 注35 吉岡博之『行永遺跡発掘調査概報』（『舞鶴市文化財調査報告』第18集 舞鶴市教育委員会） 1991
- 注36 黒坪一樹・伊野近富「桜内遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第54冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1993
- 注37 竹原一彦「下畑遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第6冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1983
- 注38 岩松保「小屋ヶ谷古墳(付後正寺古墳)」（『近畿自動車道舞鶴線関係遺跡』（『京都府遺跡調査報告書』第10冊）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1988
- 注39 芦田茂ほか「大山荘の中世土器」（『大山荘内埋蔵文化財調査概要報告書』（『西紀・丹南町文化財調査報告』第10集）西紀・丹南町教育委員会） 1992
- 注40 橋本俊介『高内鎌谷遺跡発掘調査概報』（『夜久野町文化財調査報告』第3集 夜久野町教育委員会） 1994
- 注41 森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」（『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館） 1986
- 注42 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」（『概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会） 1995
- 注43 前田均『秋里遺跡』（（財）鳥取市教育振興会） 1996
- 注44 森隆「中世の土器生産の特質と成立過程(上)(下)」（『古代文化』第45巻第5号・第6号 （財）古代学協会） 1993
- 注45 「丹後型黒色土器椀」の名称は管見によると、注44文献において森隆氏が使用されているが、本稿で検討したような具体的な内容までは述べられていない。
- 注46 高橋美久二「歴史時代の土器」（『林遺跡発掘調査報告書』（『網野町文化財調査報告』第1集）網野町教育委員会） 1977
- 注47 米子城跡下層出土資料などがある。湯村功ほか『米子城跡6遺跡』（『鳥取県教育文化財団調査報告書』44 （財）鳥取県教育文化財団） 1996、湯村功ほか『米子城跡21遺跡』（『鳥取県教育文化財団調査報告書』56 （財）鳥取県教育文化財団） 1998

4. ^{みすみ}三角古墳群第2次

所在地 舞鶴市下安久
調査期間 平成16年5月14日～8月25日
調査面積 約600m²

はじめに 今回の調査は、京都府土木建築部の依頼により、臨港道路建設に先立つ調査として実施した。

三角古墳群は、舞鶴西港を望む丘陵上に位置しており、平成15年度の試掘調査により、古墳3基(2基は木棺直葬墳、1基は横穴式石室墳)と経塚3基が存在したことが明かとなり、今年度の本調査を実施した。

調査概要 2号墳と3号墳は海が見える標高50m前後の丘陵稜線上にあり、4号墳は標高30mの丘陵腹部にある。ここからは北側にある丘陵稜線により、北方の海は望めない。経塚は今年度の調査で新たに1基確認され、合計4基となった。2号墳墳頂に1・4号経塚。3号墳墳頂に2・3号経塚がある。経塚は、円形あるいは方形土坑の上面ないし内部に礫を置き、土坑の片隅に土師製筒形容器を据えたものと、木箱を据えたと考えられるものの2種がある。

2号墳 調査区の西端にある直径16mの円墳である。中央部には高さ1.4mの石柱があり、南部には山道が造られており、これによって墳丘は改変されている。木棺直葬墳で、墳頂部に東西方向の主体部があったようだが、経塚によりほとんど削平されていた。

1号経塚は墳頂の東部にある。東西にやや長い楕円形の土坑(0.5～0.45m)の西寄りに直径10cm、器高25cmの土師製筒形容器が据えられていた。蓋は土師製で、当初は筒形容器に被せられていたようだが、土圧によって外縁は容器の外側へ、中央部は容器の内部の底の方に落ち込んでいた。錢貨2枚が内部から出土した。4号経塚は1号経塚の西側で新しく確認された経塚で、東西に長い隅丸の方形土坑(2.8×1.9m)の中に拳大の石を配していた。土坑の東寄りには30cm程度の方形に、2～3cm掘りくぼめられており、この箇所には和鏡1面(山吹双鳥鏡、直径11.3cm)、鉄製短刀1本(長さ



第1図 調査地位置図
(国土地理院1/50,000舞鶴)

30cm)、および銭貨30数枚が出土した。

3号墳 調査区の東部にある直径13mの円墳で、2号墳と同じように石柱と山道により墳丘は改変されていた。木棺直葬墳で、主体部は東西方向の長方形土坑である。掘形は一辺3.2×1.2m、深さ0.4mの規模で、木棺痕跡は幅0.4m、長さ2.5m、深さは0.2mである。鉄斧1点が掘形南肩部で出土した。2号経塚は主体部の直上で出土した、南北に長い楕円形土坑の北寄りに土師製筒形容器を据え、20cm大の扁平な石で蓋をした構造の経塚である。土師製の蓋があったが、これは土坑の中に散乱しており、筒形容器の蓋として使用した形跡はない。石の蓋によって円筒の中は上半分が空洞であった。この円筒の上部には10石ほどの石を配していた。3号経塚は墳頂部のやや南寄り確認したもので、楕円形土坑(1.5×1.85m)の中に多数の石を配していた。更に、土坑底の北寄りで地山を横方向に深く掘り、拳大から小児人頭大の円礫を充填した箇所が見いだされた。土坑の中には鉄釘が2本あり、木製の箱があったと考えられる。ほかに瓦器鍋片、銭貨5枚以上が出土した。なお、前年度調査でこの地点から水晶製数珠玉1点が出土した。

4号墳 調査区の南部にある一辺11mの方墳である。丘陵上方の斜面を大きく削り、墳形を整えている。中央部に横穴式石室を設けており、主軸は南北方向である。多くの石材は調査着手前に抜き取られていたが、奥壁は3石残存し、往時の威容を窺わせるに十分な状態であった。石室の規模は、長さ7m、幅1mである。西側は調査地外で、東側は谷になる。墳形は土砂の崩落により不鮮明であったが、墳丘の北辺はほぼ直線的に成形されていること、石室開口部の両側に設置された石列は直線的に並ぶことから、方墳と判断した。遺物は、須恵器、土師器、鉄製馬具の部品、水晶製切子玉、ガラス製勾玉など多種が出土した。6世紀末頃の築造と考えられ、7世紀前半まで追葬されている。

まとめ 古墳の上層で検出された4基の経塚は、出土遺物から平安時代末期～鎌倉時代にかけてのものと考えられる。経塚の構造は、土師製筒形容器を据えた小規模な土坑のもの2基と、や

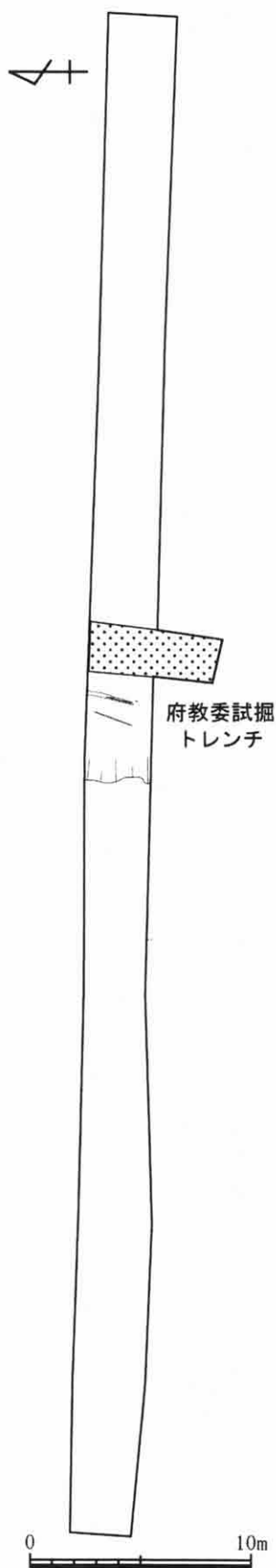
や大きな土坑の中に、銭貨とともに破碎した瓦器鍋や木箱、鉄製短刀を埋納したものの2種がある。

古墳群の調査成果としては、木棺直葬墳2基と横穴式石室墳1基を検出した。出土遺物は少ないものの、2・3号墳が古墳時代中期、4号墳が同後期に築造されたものと考えられる。これらの遺構群は、立地から海を基盤とする集落の人々によって造営されたものと考えられ、京都北部の海浜部における古墳時代や中世を考える成果が得られたといえよう。



第2図 三角古墳群全景(東から)

(伊野近富)



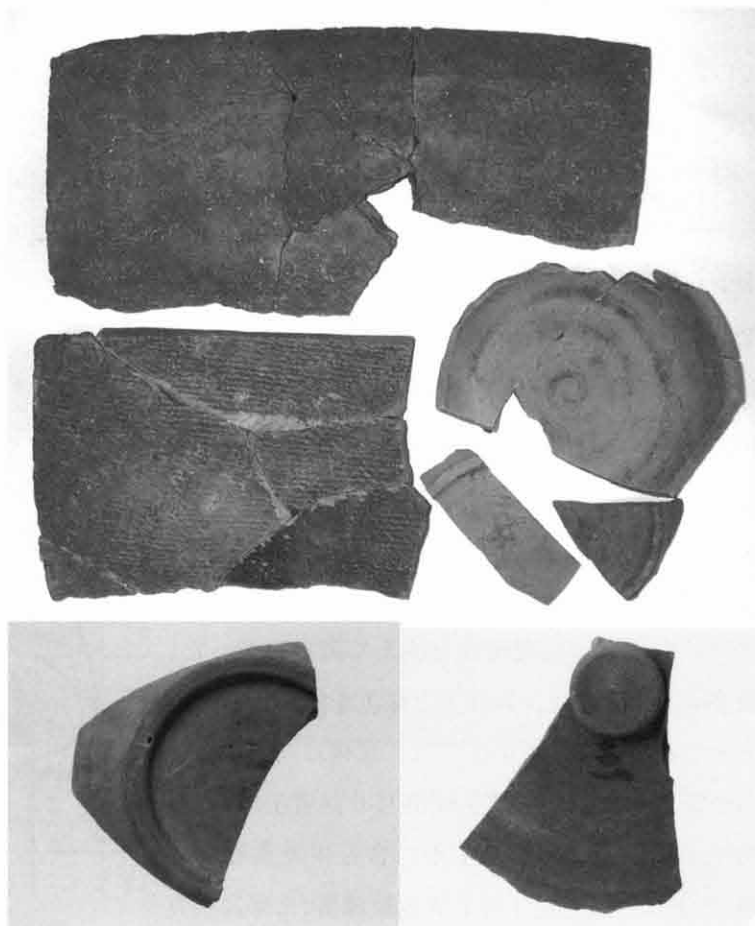
第2図 調査地平面図

ら東に向かう落ち込みの西部にのみ堆積している。また、この上面から板材が2点出土したが、固定された様子は見られない。

調査区内では顕著な遺構は検出されなかったが、奈良時代の瓦や土器が多く出土している。遺物は落ち込み西端部付近の灰色砂礫層からの出土が特に多く、西側から投棄されたと考えられる。なお、灰色粘土層からは、墨書土器(第3図)が4点出土している。

まとめ 調査の結果、西側に向かって低くなる現在の地形の傾斜とは反対に、調査地中央付近から東側に向かって地形が落ち込んでいたことが判明した。段丘の東側に南から小さな谷状の地形が入り込んでいるものと推定される。出土した瓦は第3次調査出土のものと共通する特徴を備え、三日市遺跡で生産されたものとみて間違いない。瓦や土器の出土が落ち込みの西端部付近に集中することから、今回の狭い調査区内では検出されなかったものの、西側の平坦面上に三日市遺跡の瓦窯に関連する遺構が存在する可能性を指摘することができるだろう。

(森島康雄)



第3図 出土遺物

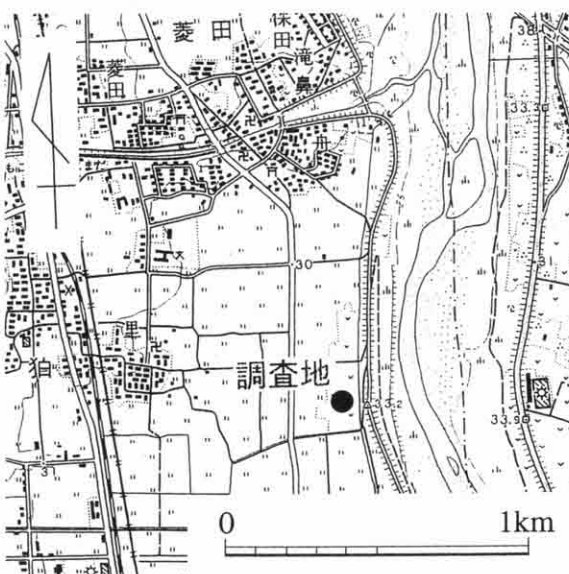
6. 椶ノ木遺跡第7次

所在地 相楽郡精華町大字下狛小字椶ノ木
 調査期間 平成16年8月17日～9月29日
 調査面積 約300m²

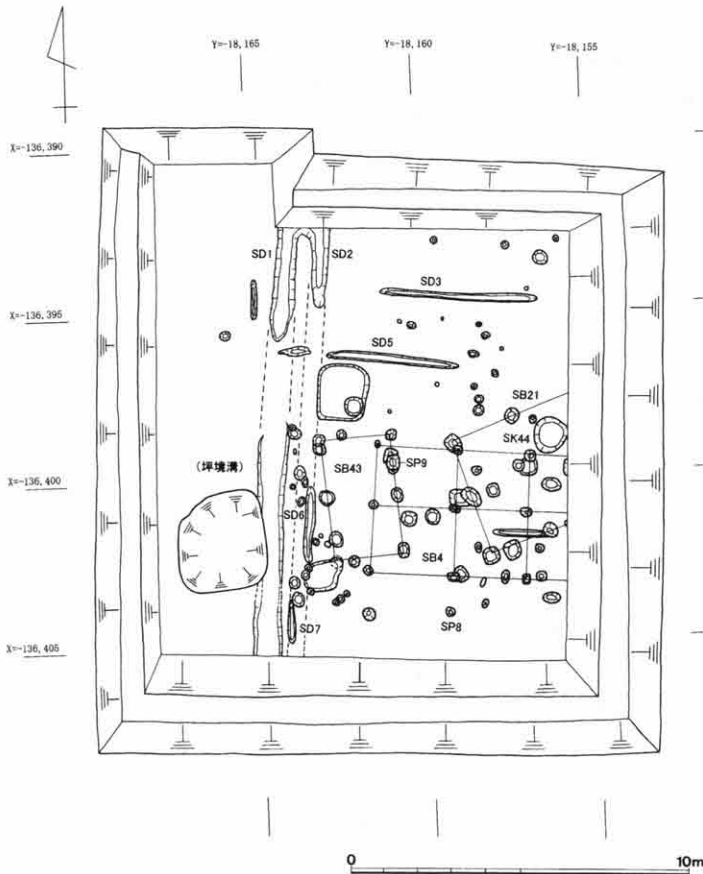
はじめに 椶ノ木遺跡は、木津川左岸の自然堤防上に立地する縄文時代～中世にかけての複合集落遺跡である。平成7年度以来、6次にわたる調査によって、縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の大溝、古墳時代前期の竪穴式住居跡、後期古墳、平安時代末～鎌倉時代の建物跡群や墓などのほか、条里制地割に由来する坪境溝や、正方位に平行ないしは直交する耕作溝群が検出されている。なかでも平安時代末～鎌倉時代は、遺構・遺物ともに豊富であり、木津川の舟運に関連する中世の大規模集落と考えられている。今回の調査は、木津川上流浄化センター内の浄化槽建設に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査概要 現地表下約2.5m掘り下げた標高約25.5m付近で、掘立柱建物跡、土坑、坪境溝および素掘り溝などの古代末～中世の遺構群を検出した。

掘立柱建物跡S B 4は、調査区東側で見つかった建物跡である。南北2間、東西2間以上の規模で、建物東端は調査区外へのびる。柱穴から瓦器碗の破片が出土しており、13世紀中頃の建物跡と推定される。掘立柱建物跡S B 21は、調査区東側で、掘立柱建物跡S B 4と重複して検出した建物跡である。南北2間、東西1間以上の規模を有し、柱間の寸法は1.7～1.9mを測る。掘立柱建物跡S B 21は、掘立柱建物跡S B 4を建てる際に柱跡の一部を削平されていることから、掘立柱建物跡S B 4に先行して構築されたことが明らかである。掘立柱建物跡S B 43は、調査区中央で見つかった建物跡である。主軸はやや西に振り、南北2間、東西1間の規模をもつ。調査区東部では、前述した掘立柱建物跡に伴う柱穴のほかにも多くの柱穴群を検出した。これらのなかには、柱穴の中に石材を置き柱の根石としたものや、瓦器碗や土師器皿が出土したものがあ(柱穴S P 8・9)、多くは12世紀後半～13世紀中頃にかけてのものである。このほか調査区東辺中央では、長さ約1mの規模をもつ土坑S K 44を検出した。白磁壺や瓦器碗、砥石などが出土し、12世紀後半頃の土坑と推定される。また、調査区中央付近でも、一辺約1.5mの規模をもつ方形の土坑を検出したが、出土遺物は乏しく、わずかに瓦器小片



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000田辺)



第2図 検出遺構平面図

柱建物跡や土坑、坪境溝、素掘り溝が検出され、集落構造と変遷を考えるうえで、貴重な資料を得ることができた。調査区の西側で検出した坪境溝の東側は、3棟以上の掘立柱建物跡が検出され、古代末～中世には、主に屋敷地として利用されていたことが判明した。これらの建物跡には、柱穴の切り合い関係や柱穴の埋土の土色から、大きく分けて2時期の建物跡があると考えられる。新しい時期の掘立柱建物跡SB4は、13世紀中頃の南北方向の主軸をもつ建物で、条里制地割に規制された建物である。調査区の北側と南側で行われた過去の調査でも、同じ主軸をもつ建物跡を検出したことから、坪内に条里制地割に規制された南北方向の主軸をもつ建物群が広がることが明らかとなった。一方、今回の調査では、これらと建物の主軸を違え、西に振る建物跡(掘立柱建物跡SB21・43)を検出したことは注目される成果である。当遺跡では、これまでの調査によって、条里制地割が12世紀後半頃まで遡ることが明らかであり、建物の多くは条里制地割に規制され、正方位に平行ないしは直交する。しかしながら、従来の調査でも、こうした方位にのらない建物跡もいくつか検出され、方格地割が12世紀後半からほとんど変わらずに維持されてきたのかどうか検討課題となっており、今回検出した建物跡は、集落の構造と変遷を考える上で貴重な資料となった。なお、調査区西側で検出した南北方向の坪境溝では、同一部分に上層から打ち込まれた近代の杭列が認められたことから、周辺では近代まで条里制地割に由来した地割が残っていたと考えられる。

(高野陽子)

が出土したのみである。一方、調査区西部では、南北に走る坪境溝を検出した。北部では2条の溝(SD1・2)として検出したが、中央部は削平され、南部では西側溝の一部および東側溝の深く掘り込まれた溝とみられる溝SD6・7を検出したに留まる。また、調査区各所で、東西方向に掘削された素掘り溝を検出した。いずれも幅約20cm、深さ約5～10cmほどの小規模な溝群である。素掘り溝からは土師器皿や施釉陶器片が出土し、13世紀後半～15世紀頃の耕作溝と推定される。

まとめ 今回の調査では、平安時代末～鎌倉時代の掘立

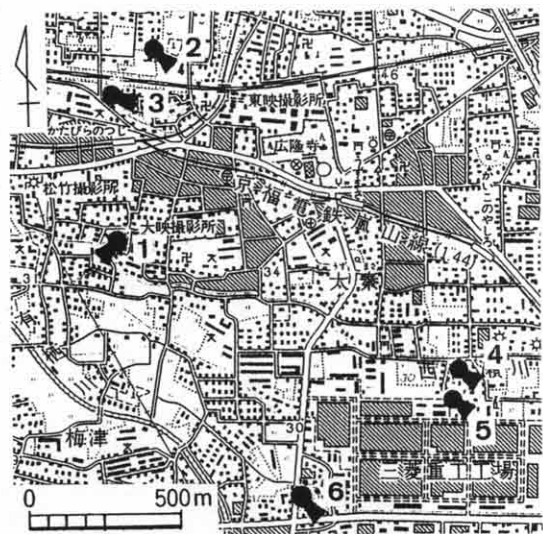
100. 史跡・蛇塚古墳^{へびづか}

京都市の西部、嵯峨野の一带には、古墳時代中期～後期末にかけて渡来系有力氏族の秦氏一族によって築かれた、数多くの古墳群が存在している。なかでも太秦^{うずまさ}の地には、清水山古墳^{しみずやま}・天塚古墳^{あまつか}・仲野親王墓古墳^{たるみやま}(垂箕山古墳)・段ノ山古墳^{だんのやま}・蛇塚古墳など、60～70m級の前方後円墳による盟主墳が集中している。これらの前方後円墳のうち蛇塚古墳は、府内最大の石室を有すること、山城地域最後の前方後円墳であること、被葬者がほぼ秦氏の統領と考えられることなどから、古墳時代を研究する人々によって常に注目されている古墳である。

蛇塚古墳の築造年代は、横穴式石室の形態などから6世紀末～7世紀初頭頃と考えられ、^{はたのかわかつ}秦河勝が被葬者の候補としてあげられている。

蛇塚古墳は、京都市右京区太秦面影町に所在する。大正11年頃には、墳丘や濠の外堤を残していたようであるが、昭和11年の日本古文化研究所による調査時には、墳丘の封土をほとんど失い、巨石を積み上げた横穴式石室が露出していたようである。石室は古くから開口していたらしく、石室内に家形石棺が存在したとの伝聞があるが、副葬品などの遺物を含めて、その詳細は明らかではない。現在は、石室とその周囲の僅かの範囲が、昭和52年に国の史跡指定を受け、保存されている。

蛇塚古墳は、大正11年測図の『京都市都市計画基本図』によれば、およそ全長75m、後円部径43m、前方部幅40mの規模であったことが分かる。後円部に存在する埋葬施設は、巨石を用いて構築された両袖式の横穴式石室で、南東方向に開口している。石室の規模は全長17.8m、玄室長6.8m、同幅3.8m、同高5.3m、羨道幅2.6mを測る。石室の石組みは、奥壁に高さ3.2m、幅3.6mの巨石を使用しており、現在は失われているが、その上にやや小さい目の石が積み上げられていたものと推測される。また、玄室側壁や羨道にも巨石が使用されており、最大のものでは長さ4.3m、幅2.8mを測る。通路である羨道と玄室の境となる玄門部の袖石は、高さ3.3mの一枚石が使用されている。天井石は、玄室に1枚、羨道部に3枚が残っている。現在、羨道部の天井石は今にも崩落しそうな状況から、安全のため鉄製の支柱で下から支えられている。



第1図 蛇塚古墳と周辺の主要古墳

(国土地理院1/25,000京都西北部)

- | | |
|------------|-----------|
| 1. 蛇塚古墳 | 2. 太秦馬塚古墳 |
| 3. 仲野親王墓古墳 | 4. 清水山古墳 |
| 5. 天塚古墳 | 6. 段ノ山古墳 |

この蛇塚古墳の石室は、蘇我馬子の墓と伝承される奈良県明日香村の石舞台古墳とほぼ同規模で、引けを取らない大きさをもっている。蛇塚古墳の玄室面積は25.8㎡を測り、国内では三重県高倉山古墳(33㎡)、岡山県こうもり塚古墳(27.5㎡)、奈良県石舞台古墳(26.4㎡)に次いで4番目の大きさを測る。石室の内部に入ればその巨大さをより実感できるが、前記の安全上の観点から、現在は石室内への立ち入りが禁止されている。

蛇塚古墳の被葬者として考えられている秦河勝は、6世紀末～7世紀前半の秦氏の統領であり、厩戸皇子(聖徳太子)の側近でもあったとされる。『日本書紀』によれば、秦河勝は推古11(603)年に厩戸皇子所有の仏像を授かり、この仏像を安置するため蜂岡寺(広隆寺)を造立したとされている。また、『広隆寺縁起』には、推古11年に仏像を受け、推古天皇の壬午の歳(推古30年)に厩戸皇子のために広隆寺を建立したと記されている。

蛇塚古墳へは、京福電鉄嵐山線の帷子の辻駅からほぼ真南へ約400m、住宅の密集した狭い道を幾度か折れながら南に進むと、突然、家並みの間に蛇塚古墳の巨大石室が姿を現す。普段目にする機会のない横穴式石室全体の姿はどこか異様であり、巨大なごつごつした岩肌の重なりは一種独特な雰囲気をもたせている。一見の価値があり、嵐山・嵯峨野の散策や広隆寺拝観の折には、一足延ばして立ち寄られてはいかがであろう。古墳は、入り組んだ住宅街の中にあり、迷わずに訪れるには本誌か地図を持参されることをおすすめする。

(竹原一彦)

注 蜂岡寺は、北野廃寺(右京区白梅町)とする説もある。

参考文献

佐原真ほか『古代史探検—京・山城—』 京都書院 1994

樋口隆久『京都考古学散歩』 学生社 1976

京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代』 1971



第2図 南東から見た蛇塚古墳

岡京期の「離宮・苑池」的な性格が想定されている北辺官衙域における重要な情報が得られた。阪急「西向日」駅の南西隣の宮第434次調査では、宮第97次において朝堂院第一～四堂と同規模に復原されていた建物跡の北西部の調査が実施され、新たに礎石の根石と布掘地業が確認された。身舎と庇で地業の工法が異なるとした既説に倣うことで、東西4間(12m)×南北7間(27m)以上の規模を有する南北棟で東西両面に廂を備えた平面形式の礎石建物であることが判明した。

左京域 左京第492次では、東二坊大路の東側溝が検出されたほか、弥生中期後半の土器祭祀の形跡を残す流路や溝が確認された。東院の南方に位置する左京第495・496・497次調査では、条坊関連の遺構検出に重点をおいた調査の結果、東二坊大路東側溝と一条条間南小路北側溝などが調査されている。

右京域 JR長岡京駅西側地区の再開発に伴う一連の調査は、右京第836次で一段落することになり、この間の調査成果がまとまった。右京第820・826次では、長岡京期の遺構の検出はなく、弥生時代中期の方形周溝墓の周溝や土壙墓(第820次)、14世紀前半の掘立柱建物跡や土坑(第826次)、近世勝龍寺城の西外郭(外堀)に近接する城内の「御足輕町・侍屋敷」を想起できる柵や溝(第820次)などが確認された。長岡中学校の北隣の右京第823次調査では、長岡京期に属する規模の大きな柱掘形をもつ掘立柱建物跡と柵が検出された。全容は不明ながら、全ての柱穴に柱抜き取り跡があり、建物跡の南西隅の柱からは地鎮を示す土器(「太」墨書含む)埋納が確認された。右京第827次では、乙訓地域で最大規模の古墳時代中期の前方後円墳である恵解山古墳の、保存整備を目的とした調査が行われ、前方部前端の西コーナー部と西側くびれ部の墳丘基底に遺存する葺石から前方部の西側に取り付く造出の存在が明らかになった。また、前方部墳丘テラスの埴輪列が初めて検出された。京域の北西、大原野地区における右京第831次調査では、中世後期の石見城推定地の南西に接する地点の調査が実施され、上層遺構として、鎌倉時代の盛土造成を伴う、南辺に礎石建ちの門が開く掘立柱塀を備えた屋敷関連遺構が確認された。右京九条二坊二町に位置する境野古墳の第4次調査では、先に古墳時代前期後半築造の前方後円墳であるとした成果を受けて、墳丘西側くびれ部の後円部側への拡張調査および後円部北側の墳丘の状況を把握するための調査が実施された。くびれ部においては、下段墳丘の上面テラスをめぐる埴輪の樹立が、テラス面整形や墳丘の構築と一連の作業のもとで段階的に行われている様子が判明するとともに、造成土中に樹立埴輪とは異質な埴輪片が混入するなどの新たな発見もあった。古墳の現況を比較的良くとどめているとみられていた後円部北側の調査区では、後世の改変が著しく、下段墳丘の一部が残存していたものの、くびれ部埴輪列から復原された想定位置に埴輪列は遺存せず、その斜面から埴輪片が一括で出土した。また、後世の客土中から内部主体の副葬遺物とみられる石釧や車輪石・管玉・刀子状鉄製品などが出土している。

京域外 京域の北郊に位置する修理式遺跡では第11次として調査が継続されている。新たな調査成果として、京域を越えて北へのびる長岡京東一坊大路延長道は、小面積グリッド調査による制約もあるが、調査対象地内の中で途切れていることが判明した。

(伊賀高弘)

センターの動向(04.08~10)

1. できごと
8. 2 時塚遺跡第8次(亀岡市)発掘調査開始
- 3 辰巳和弘同志社大学教授時塚古墳現地指導
- 4 人権大学講座(於：キャンパスプラザ京都)石井清司調査第3係長出席
- 7 三角古墳群第2次(舞鶴市)現地説明会
- 14 「第21回小さな展覧会」開催(於：向日市文化資料館)
- 17 小野山節京都大学名誉教授時塚古墳現地指導
- 18 上田正昭理事長時塚古墳視察
椋ノ木遺跡第7次(精華町)発掘調査開始
- 19 山下信一郎文化庁調査官、都出比呂志理事時塚古墳視察
- 20 平成16年度教育庁役付職員人権問題研修Ⅰ(於：京都市)安田正人総務課長、奥村清一郎課長補佐、伊野近富次席総括調査員、引原茂治・竹原一彦・戸原和人・岩松保主任調査員出席
- 21 時塚古墳・時塚遺跡第6次(亀岡市)現地説明会
- 22 第100回埋蔵文化財セミナー・長岡京跡発掘調査50年記念講演会(於：向日市民会館)
- 25 三角古墳群第2次(舞鶴市)発掘調査終了(5.14~)
- 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 26 理事協議会(於：当センター)上田正昭理事長、杉原和雄常務理事・事務局長、石野博信、井上満郎、都出比呂志、中谷雅治、高橋誠一、上原真人、下田元美各理事出席、「第21回小さな展覧会」視察
- 29 「第21回小さな展覧会」終了(8.14~)
- 30 平成16年度教育庁役付職員人権問題研修Ⅱ(於：京都市)森下衛調査第1課長、小山雅人総括調査員、松井忠春・増田孝彦・田代弘・森島康雄主任調査員、今村正寿主任出席
9. 6 諸畑遺跡第3次(八木町)発掘調査開始
- 池尻遺跡第5次(亀岡市)発掘調査開始
- 10 時塚遺跡第6次(亀岡市)発掘調査終了(4.23~)
- 15 大垣・一の宮・難波野条里制遺跡(宮津市)発掘調査開始
- 17 職員研修(於：当センター)講師：筒井崇史調査員「日本海沿岸地域における古代土器様相の比較検討」
- 21 薪遺跡第6次(京田辺市)発掘調査開始
- 椿井遺跡(山城町)発掘調査開始
- 人権大学講座(於：キャンパスプラザ京都)安田総務課長出席
- 22 長岡京連絡協議会(於：当センター)

- 24 棕ノ木遺跡第7次(精華町)関係者説明会
9. 28 平成16年度亀岡市人権教育指導者研修会第2講座(於：ギャラリーかめおか)安田正人総務課長、長谷川達調査第2課長、小池寛調査第1係長、森島康雄主任調査員出席
- 28～10. 6 埋蔵文化財発掘技術者専門研修「古代交通遺跡調査課程」(於：独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)竹原一彦主任調査員参
10. 1 棕ノ木遺跡第7次(精華町)発掘調査終了(8.18～)
- 5 乙訓文化財事務連絡協議会担当者会(於：大山崎町)水谷壽克課長補佐出席
- 8 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋文研修会(於：八尾市)杉原和雄常務理事・事務局長、小池寛調査第1係長、戸原和人主任調査員、岡崎研一専門調査員、柴暁彦・高野陽子調査員出席
- 13 園部城跡第6次(園部町)発掘調査開始
- 14～15 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：和歌山市)石尾政信専門調査員、北邑靖史主査、鍋田幸世主事出席

- 21 池尻遺跡第7次(亀岡市)発掘調査開始
- 25 長岡京跡右京第842次(長岡京市)発掘調査開始
- 27 舞鶴市田辺城跡調査委員会、森下衛調査第1課長出席
長岡京連絡協議会(於：当センター)

2. 普及啓発事業

8. 22 第100回埋蔵文化財セミナー・長岡京跡発掘調査50年記念講演会(於：向日市民会館)『日本都城制の源流を探る－前期難波宮と中国都城制－』：中尾芳治当センター副理事長、『今年の小さな展覧会の見どころ』伊賀高弘当センター主査調査員



第21回小さな展覧会の会場風景

【お詫びと訂正】前号第93号に以下の誤植がありましたのでお詫びして訂正いたします。

頁	場所	誤	正
3	第2図最下段の図	(左から) a a	(左から) a' a
4	25行目	こうした状況のもと	こうした状況のもと
7	14行目	延喜式	【延喜式】
26	4行目	筒井崇史調査員の所属は調査第2課調査第2係の誤りです。	

編集後記

今年の日本列島は猛暑に続き、相次ぐ台風や大地震などの自然災害に見舞われました。京都府でも丹後地域は、台風23号により大きな被害を受け、いくつかの発掘現場では台風後の復旧作業に追われました。

発掘調査では、人々の生活の跡だけでなく、過去の地形や自然環境の変遷がわかることもあります。例えば、古い地震痕の年代測定などに考古学のデータが大きく役立っています。

発掘調査のデータを新たな視点で分析し、防災面や暮らしのなかに活かすことができないか。今後の課題です。

(編集担当=辻本和美)

京都府埋蔵文化財情報 第94号

平成16年12月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141